

平成17年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集:日韓スポーツ交流シンポジウム

「日韓のスポーツ、そして日韓のサッカー」



目 次

巻 頭 言	1
I. 特集:日韓スポーツ交流シンポジウム	
「日韓のスポーツ、そして日韓のサッカー」	5
Ⅱ. 研究活動記録	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	
2. 所内定例研究会発表要旨	
3. Hiyoshi Research Portfolio 2005 参加報告 ······	
4. 大学体育連合中央研修会参加報告	40
Ⅲ. 教育活動記録	
Ⅲ-1. 授業の実施	
1. 平成17年度体育科目の履修者統計	45
2. 授業評価の実施	
3. 通信教育部対象の科目	58
4. 他学部および塾内における授業協力	59
Ⅲ─2.スポーツイベントの開催	
1. 塾長杯・塾内競技会	60
2. 体育科目ガイダンス期間中のイベント	64
3. 公開講座(他)	64
4. 所内施設の開放	67
IV. 第 2 特集「複合施設建設に伴う体育研究所の移転」	
1. 創立150年記念事業に伴う体育研究所棟の取り壊しと移転について	71
2. 体育関連施設の変容(新旧比較)	
3. 体育研究所懇親会(さよならパーティー)	76
V. 業務活動記録······	

			:
			٠

巻 頭 言

本年度はふたつの特出すべき事項がありました。まず、第一は日韓国交回復40周年を迎えた記念すべき年の12月に、慶應義塾大学・延世大学校スポーツ交流シンポジウムを開催できたことです。日韓関係をマスコミは政冷経熱と言い、政治は別にして経済やスポーツ・芸能は交流が非常にスムースに行われている事は周知の事実です。

本研究所では、これまでもスポーツを振興する目的で様々な企画を行なってきました。その一環として、一つは日韓国交回復40周年を祝し両国間の親睦を図ること。第二番目には慶應義塾大学と延世大学校のスポーツを通じた更なる交流の促進。第三番目にはサッカーワールドカップドイツ大会を間近に控え、サッカーを通じた両国スポーツの考究を目的としてシンポジウムを開催いたしました。

このことは、2004年12月に慶應義塾大学と延世大学校との間に包括提携が行われ、その中にスポーツ交流が上げられた事が要因となりました。

これからもスポーツを通して、延世大学のみならず諸外国の大学と交流したいと考えています。

第二は、本研究所が、陸上競技場とプールを見渡せる立地条件の良い場所から移転することになりました。新棟ができるまでは藤山記念館二階で今まで通り研究・教育活動を行ないます。昭和36年、体育科目の教育及び研究活動を統一的に行なうことを目的とし、大学体育研究所が発足しました。昭和50年12月に陸上競技場とプールの間に大学体育研究所が竣工し、爾来30年0月日を数え移転することが決定しました。

理由は、2008年慶應義塾創立150年記念事業において日吉キャンパスが再構築されることでした。その基本テーマ・コンセプトは、「感動体験を基礎とした新しい教養教育」および「未来の知的価値の創造と実業世界の開拓を行なう大学院教育」を構築し、さまざまな人々による交流と社会の連携が生まれる開かれたキャンパスを構築することです。

本研究所は「協生コア」のエリアに位置し、大学院・社会連携複合施設の中で活動を行なう 予定でしたが、十分なスペースが確保できない為に新棟に移転するという苦渋の決断をしたの でした。

心と身体の問題がクローズアップされている今日、健康・体育・スポーツ活動等を促進する 為に新棟の果たす役割は大きいと考えています。感動教育・体験教育の実践を支える本研究所 がはたさなけれならない役割の重要性を再認識しています。

·		÷	
			٠

I. 特集:日韓スポーツ交流シンポジウム 「日韓のスポーツ、そして日韓のサッカー」

概 要

平成16年12月に慶應義塾大学と延世大学(韓国)との間に包括協定が締結された。また、平成17年は日韓国交回復40周年を迎え、両国政府によって「日韓友情年」と指定された。そこで、これを契機に両校のこれまでよりも活発なスポーツ交流の実現を図り、両国の友好関係をより親密なものにすることを目的として、体育研究所では日韓のスポーツ交流に関するシンポジウムを開催した。その内容について報告する。



1. 事業目的の概要

- ・日韓国交回復40周年を祝し、両国の親睦を 深めること
- ・サッカーワールドカップドイツ大会を1年 後に控え、日韓両国が共に出場を決めたことを契機に、サッカーを通じた両国スポー ツ文化の考究
- ・慶應義塾大学と延世大学のスポーツを通じ た更なる交流の促進

2. 事業計画

7月下旬 シンポジウム実行委員会設置 (塾生リーダーを含む)

8月~9月 延世大学との調整

9月下旬 企画運営担当学生決定(体育 実技履修者より募集)

10月~11月 事前準備

12月中旬 シンポジウム開催

3. シンポジウムの概要

1) 日程

平成17年12月15日(木) 14:15~18:10

2)場所

日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペース ス

3) 内容

第1部「日韓交流におけるスポーツの果た す役割」

司会:石手 靖(体育研究所助教授) シンポジスト:

植田 史生(体育研究所教授・同所長)

小針 進(静岡県立大学国際関係学部助 教授)

吳 利澤(延世大学校同窓会体育文化委 員常任理事)

陸 東元(延世大学校社会科学学部体育 教育学科助教授)

第2部「これからの日本と韓国のサッカー」 司会:後藤 健生(サッカージャーナリス ト・塾員) 対談メンバー:

藤口 光紀((財)日本サッカー協会特任 理事・塾員)

反町 康治 (アルビレックス新潟監督・塾 員)

李 宇韺(体育研究所非常勤講師・元サッカー韓国代表選手・延世大卒)

林 峻燮(留学生代表、法学部(法律学科)2年)

石川 徹(体育会ソッカー部員代表、法 学部(法律学科)2年)

吉田 隼人(一般塾生代表、文学部1年)

4)後援・協力など

後援:慶應義塾大学東アジア研究所

協力:延世大学校

外務省(日韓友情年2005記念事業)

慶應義塾体育会

慶應義塾体育会ソッカー部

同時通訳:(株)サイマル・インターナショ ナル

なお、このシンポジウムは、「日韓共同スポーツ文化交流を通した教養教育の実践」として、大学教養センター企画「新しい教養授業の支援」事業に採択された。

4. シンポジウムの実際

1) 第1部「日韓交流におけるスポーツの果 たす役割」

所長挨拶

植田 史生

大学体育研究所では、これまでもスポーツを振興する目的で様々な企画を行なっています。シンポジウムもその一環として行ってまいりましたが、本日、慶應義塾大学・延世大学校スポーツ交流シンポジウムが開催できる事は喜ばしい限りであります。2004年12月に慶應義塾大学と延世大学校との間に包括提携が行われました。その中にスポーツ交流が上げられています。これより先に、1964年東京

オリンピックの年から体育会ソッカー部においては延世大学校との定期戦が年1回隔年相互訪問の形でスタートしています。また、2002年にはワールドカップ日韓共催の記念試合として慶應・延世連合と早稲田・高麗連合の試合が行われたと聞き及んでおります。このことからも延世大学校は、韓国の慶應という事でしょう。

今年は日韓国交回復40周年を迎えた記念すべき年でもあります。それに伴い様々な企画が行なわれています。日韓関係をマスコミは政冷経熱と言い、近くて遠い国とも言われています。政治は別にして経済やスポーツ・芸能は交流が非常にスムースに行われている事は周知の事実であります。一例として昨年来の韓流ブームが上げられると思います。いまだにその熱は冷めていないようです。多くのスポーツでも韓国との交流や日本での活躍が見られています。

繰り返しますが、第一に日韓国交回復40周年を祝し両国間の親睦を図る。第二には慶應義塾大学と延世大学校のスポーツを通じた更なる交流の促進。第三にサッカーワールドカップドイツ大会を来年に控え、サッカーを通じた両国スポーツの考究を目的としてシンポジウムを開催いたしました。シンポジストの小針先生、呉先生、陸先生宜しくお願いします。また、第二部の後藤先生始め対談メンバーの皆様活発な討論をお願いします。最後になりますが、後援をいただきました慶應義塾大学東アジア研究所、協力をいただきました延世大学校、外務省、慶應義塾体育会並びに体育会ソッカー部に対しまして衷心より御礼申し上げます。

日韓交流に必要な認識とスポーツ交流の役割 小針 進

最近の日韓関係は、韓国での日本大衆文化 開放、2002年サッカーW杯共催、日本での韓 流ブームなど文化交流が活発になる一方、

2005年2月の「竹島の日条例」で政治的関係 が悪化し、多くの交流イベント等が韓国側の 要請で中止または延期となっている。日韓両 国民の相互意識についても、2004年9、10月 の調査では、56.6%の日本人が韓国人に対し て親近感を持ち、53.6%の韓国人が日本人に 対して親近感を持っていたが、2005年7月の 調査では56.6%の日本人が韓国人に対して親 近感を持っているのに対し、韓国人が日本人 に対して親近感を持っているのは27.9%に落 ち込んでいる。このように関係悪化と政治的 要因による誤解は両国国民の相互認識にも悪 影響を及ぼしている。ただ、相互認識は政治 的・社会的要因だけでなく、「個人レベルで の『悪意のない誤解』によって影響され、相 手国への懐疑的な意識を生み出している」側 面もある。たとえば、「日本は植民地支配に 対して謝罪していない(韓国人)」「韓国は日 本の経済協力に感謝していない(日本人)」 など、事実に無知なために招いている相手国 への誤解や批判も少なくない。これは、両国 及び両国民の間に接触経験があれば、個人レ ベルでの『悪意のない誤解』は避けられるの ではないだろうか。ここに交流の重要性を認 めることができる。

交流においてあるべき共通認識としては以 下の4つがあげられる。

- ・外交関係が悪化しても、どんな交流であれ、 中断させてはならないという共通認識を持 つべきである。
- ・行政サイドは、民間交流の要望にかなうように配慮すべきである。行政が主導で始まった交流が次第に民間へ広がって、市民が自発的に交流が行えるような環境が望ましい。
- ・交流には韓国通の日本人、日本通の韓国人、 相互の留学生、在日韓国人の参加が不可欠 だが、同時にこれまで相互に縁のなかった 人々を巻き込むことが必要である。
- ・スポーツ交流などの人的往来数を絶対的に

拡大させる必要がある。

また、交流を促進するために必要な環境と して以下があげられる。

- ・日韓間には政治・外交関係の悪化が民間交流に影響を及ぼす構造があり、これが不安定であると、すべての分野での交流が安定を得られないという点を関係者は第一に確認しておくべきである。
- ・スポーツ交流、大衆文化接触などソフト・パワーの意義を軽く見ないことが重要である。 日本人の韓国に対する親近感の時系列データを見ると、2002年サッカーW杯時は20代、30代の間で、2004年は韓流ブームの中心世代である40代、50代の間で親近感が上昇している。また、韓国人の日本人に対する親近感も1995年の26%から2002年には42%に上昇している。

てのように、スポーツが両国の交流に果たす役割は大きいものがあるが、一方で排外的なナショナリズムが蔓延しないような環境を作ることも必要である。スポーツ交流での自国チームへの激しい応援、相手国チームのフェアプレーへの拍手、試合中の適度なブーイングは「国際協調型の愛国心」の範囲内である。しかし、相手国チームの国歌斉唱時の度を過ぎたブーイングや、両国間の外交摩擦上の政治的スローガンが書かれた横断幕の持込などは「排外的なナショナリズム」の現れであろう。

「国際協調型の愛国心」を持つことは当然だが、交流の場に限らず、「排外的なナショナリズム」をどう抑制させるかは、日韓関係の発展にとって重要なポイントであると考える。

延世大学の体育会について

呉 利澤

延世大学の体育会は、数名の OB が集まって1947年に結成された。延世大学体育会と高麗大学体育会は、日本の早慶のようなライバル関係にあり、延世大学と高麗大学の定期戦

は、サッカー、野球、バスケットボール、アイスホッケー、ラグビーの5種目を2日間にわたって行っている。今年は4勝1敗のよい成績を残すことができた。その喜びは大変に大きいものである。学校を挙げての定期戦は良好のスポーツを通しての発展につながる。

1980年以降、サッカー、野球、バスケットボールなどスポーツのプロ化が進んだが、それまではアマチュア最高レベルの選手が延世大学、高麗大学に集まってきた。その頃は優秀な選手の80%以上が延世・高麗大学に集まってきた。

高麗大学は早稲田大学と、延世大学は慶應義塾大学とサッカーの定期戦を行っている。それと同じように、慶應義塾大学と延世大学の体育の教員が良い交流を結べることを望んでいる。このようなシンポジウムを次回は韓国で開催できたらよいと思う。

延世大学の体育教育の現在と未来

陸 東元

延世大学の体育教育は以下の3つの分野で 行われている。

- ・体育教員養成のための体育教育学科
- 社会体育指導者養成のための社会体育学科
- ・延世大学生のための教養体育(107講座)

体育教育学科は、教育目標実現のための中等教員の養成、グローバル化にふさわしいスポーツ指導者の養成、スポーツ科学を牽引する専門家の養成を目的としている。教科教育論、運動学習、バイオメカニクス、スポーツ生理学、スポーツ心理学、スポーツ社会学、スポーツ哲学などの理論科目が開講されている。また、実技科目として、陸上競技、体操、バスケットボール、バレーボール、サッカー、水泳などが開講されている。

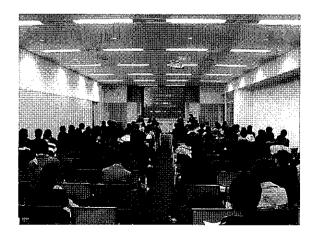
社会体育学科は、国民の健康促進、余暇の 有効な利用を促進するような社会体育の指導 者を養成することで、「Sports for All」の実 現を図ることを目的としている。社会体育論、 トレーニング論、社会体育とコンピュータの 活用、スポーツとメディア、スポーツマーケ ティングなどが理論科目として開講され、エ アロビクス、テコンドー、ダイビング、スポー ツマッサージ、護身術なども実技科目として 開講されている。

延世大学生の健康のための教養体育として、 全部で107種目が開講されている。インライン スケート、ヨガ、ヒップホップダンスなどバ ラエティーに富んだ種目で構成されている。

また、夏季や冬季の休業中に実施される集中授業もあり、冬季は、スキー、スノーボード、対人関係コミュニケーション、夏季は、ゴルフ、サバイバルゲーム、ヨット、ダイビング、ウィンドサーフィンなどが開講されている。これらの授業は安い費用、快適な生活環境、優秀な講師、多様なプログラム展開など、学生の満足度も高い。

延世大学の体育教育の未来への課題として は以下が挙げられる。

- ・総合体育館の建設
- ・専門教育の充実
- ・教養体育のプログラム開発
- ・健康スポーツと関連させたプログラム開発
- ・運動部の競技力向上のための体育科学プログラムの開発及び適用
- 2)第2部「これからの日本と韓国のサッカー」 藤口 光紀・反町 康治・李 宇韺 司会:後藤 健生



2006年ワールドカップの組み合わせについて

藤口:私が選手の頃はワールドカップは夢の舞台であった。それが、3回連続出場を果たし隔世の感がある。日本の入ったF組は、良い組み合わせとも思うが、どのチームも簡単には勝てないと思う。サッカーでは何が起こるかわからない。これからの半年、いかにいい準備をしていくかが大切である。みんなで期待していきたい。

反町:グループリーグの3試合だけでは本当の実力ははかれない。ホームアンドアウェーで試合を行えば、かなりの確率でブラジルが1位になるだろう。しかし、他国で3試合行う場合には予想が難しい。とにかく初戦が大事になる。初戦の結果で大きく変わってくるだろう。監督の立場で考えると、攻撃面では日本の特性が発揮できるだろう。しかし、高さという点で、守備面では厳しい。悲観も楽観もできないが、その分いい準備ができるだろう。

李 :残念ながら私はワールドカップには出場できなかったが、スタッフとしてワールドカップに行きたいという夢を持っている。今回の組み合わせについて、フランスは前回ワールドカップで残念な結果に終わっているので、今回は全力を尽くしてやってくると韓国では報道されている。スイスは韓国のように組織力を持っていて、フィジカルが強いチームだと言われている。トーゴは初出場のチームで、韓国がべことは初出場のチームで、韓国がべらないといわれている。

後藤:日韓どちらもベスト16がひとつの目標 になるだろう。2010年ワールドカップ でアジアの枠を減らさないようにどち らのチームも頑張ってほしい。

日韓のサッカーの特徴と育成システム

藤口:韓国はフィジカル、メンタルが強く、 スピードがある。日本はスキルが高い といわれている。私が初めて韓国チー ムと対戦したのは今から35年前だっ た。その頃は技術、体力、メンタルす べて韓国の方が1枚も2枚も上だった。 日韓関係が微妙な時期で、韓国チーム は日本に対して強い気持ちを持って望 んできた。

李 :韓国代表選手は、日本戦の前日にはよく眠れないことがある。なぜなら、国民が非常に強い関心を持っているのでプレッシャーを感じているからである。私もオリンピック予選では負けてはいけないというプレッシャーを常に感じていた。私の年代でもこのような気持ちで戦っているので、私の前の世代では、もっと強く感じていたと思う。

反町:日韓がセンシティブな関係であったことは否めないが、1998年フランスワールドカップアジア予選の頃から雪解けが始まったように思う。その頃から一時期日本が韓国をリードした部分センターの設置や若年層の強化を図り、韓国を逆転されているようにも思う。韓国の選手はあたりが強いというイメージがあるが、最近は技術の高い選手も覚えている。ドイツワールドカップマジア予選で苦労した分、たくましくなっており、若い世代へのスイッチもうまくいっていると思う。

後藤:精神力が韓国のバックボーンにあるように思う。韓国では日本より10年以上前にサッカーがプロ化されたが、日本のJリーグの成功によってKリーグも刺激を受けている。韓国では若い選手を育てる組織はどのようになっているか。

李 :日本が韓国と比べて優れているところ は協会の運営システムである。指導者 養成やJリーグの運営などは韓国が日 本から学ぶところだと思う。韓国も最 近は若い指導者や選手の養成について 関心が高くなり、ヨーロッパ等に指導 者の派遣も行っている。日本と韓国の 中高生世代のサッカー選手を比較した 興味深いデータがある。学校のクラブ 活動では、韓国に比べて日本のほうが、 チーム成績のよい学校の選手の指導者 に対する評価が低い。つまり、学校の 部活動参加者もレベルの高い指導者を 求めているのである。日本の場合は、 教員になるために教職をとる必要があ り、必ずしも学校の指導者がサッカー 経験者ではないという現実がある。韓 国では、逆にプロサッカー出身の指導 者が多い傾向にある。

藤口:日本は常に韓国を手本にしてきた。J リーグが 1993 年にできて日本のサッ カーをめぐる環境は大きく変わった。 「育成なくして強化はない」というこ とで下部組織を作り、良い選手を輩出 するシステムを構築してきた。2002年 にはJリーグアカデミーを立ち上げ、 就学前の子どもたちからサッカーを楽 しめるような環境を作り、育成システ ムの見直しを行った。その成果が現れ てきている。子どもにとってはとにか くたくさんボールに触れることが大事 である。そのためには、8人制や4人 制などいわゆるスモールゲームが望ま しい。しかし、未だに11人制の全国大 会が行われている。まだやるべきこと はたくさんある。

後藤:日本の育成システムは優れているとい われるが、最近は韓国でも若い選手が たくさん出てきている。日本の育成シ ステムの問題をどのように考えるか。 反町:高校や大学からJリーグに入っても最初はなかなかベンチ入りすることができず、真剣勝負の試合から遠ざかっている。例えば、スペインでは、FCバルセロナというチームがバルサBというチームを作って、J2レベルのリーグ戦で試合をしている。育成システムによって、うまい選手は出てきているが、その選手が本当にいい選手になるが、その選手が本当にいい選手になるが、その選手が本当にいい選手になるが、その選手が本当にいい選手になるが、その選手が本当にいい選手になるが、その選手がある。その要因として、真剣勝負の経験が少ないことがあるように思う。若手の選手が真剣勝負の試合に望めるようなシステム構築の必要がある。

後藤:ジェフ千葉では、ジェフアマチュアというチームを作って JFL リーグに参加している。韓国で真剣勝負の試合に出るシステムはあるか。

李 : サテライトリーグでは地域に分かれて 試合を行っている。

藤口:地域リーグについては、地域によって レベルの差に大きな違いがあるので現 在は難しい。その一方、来年はヴァン フォーレ甲府がJ1に昇格する。この チームは、数年前には消滅の危機に あった。それを数年で建て直し、6億 円という運営費でJ1昇格を果たした。 お金だけで勝利は得られないというよ い例である。

反町:関東、関西に比べると選手の層をキープするのが難しい。若手育成の目的で、アルビレックス・シンガポールというチームを持っている。また、スカウトも高校・大学だけでなく、JFLから行う必要もある。いろいろなアイディアを使うことが、Jリーグひいては日本のサッカーをよくすることにつながる。

後藤:日本はこの前アジアチャンピオンに なったが、少しの油断で転落する危険 性もある。韓国はソウルに一極集中しているが、地域の人材を救い上げる工夫をしているか。

李 : ソウルを本拠地にして運営している チームに選手たちは行きたいと思って いる。たとえば、FCソウルや、スウォ ン・サムソンなどである。それらの チームに才能のある若い選手が集まっ ている。地方のチームは選手の確保に 苦労している。地方にいるよい選手を スカウトするシステムは日本とは大差 がない。

日韓がお互いに学ぶこと

後藤:日韓はこれまでお互いに切磋琢磨して きた。お互いに学ぶべき点についてど う考えるか。

李 :現在は、Jリーグ、Kリーグとも各チーム外国人枠は5名まで登録可能、3名まで出場可能となっている。個人的な考えだが、東アジアの国は、UEFA(ヨーロッパ・サッカー連盟)のように外国人枠を設けない方がいいのではないかと思う。ライバル関係というだけではなく、他国と対等に戦うために相互協力していくべきではないかと思う。

藤口:ヨーロッパではEU圏内の外国人枠がなくなり、小さい国の選手が強いリーグの試合に出ることによって、その国の強化につながり、ヨーロッパ全体のレベルが上がった。その一方で、いわゆるサッカー大国では、自国の強化につながらなくなったという意見もある。今のところ外国人枠3名は適切ではないか。また、アジア枠を作るという方法もある。

後藤:外国人枠が撤廃になった場合、現場と して何か難しいことはあるか。 反町:外国の選手を獲るということは、通訳 などそれだけ経費もかかることにな る。また、複数の国の選手をまとめ上 げることは非常に難しい。優秀な外国 人選手が来ることは良い面もあるが、 それなりの覚悟が必要になる。

後藤:現在、韓国の選手がJリーグにたくさん来ている。日本の選手が韓国のKリーグに受け入れられる状況はあるか。

李 : 昔と比べて日本に対する厳しい感情はない。若い世代は日本に対して開放的な考えを持っているし、Jリーグにも関心を持っている。選手と指導者がお互いの国に行って一緒にやることによって学ぶべき点はたくさんある。私その一人だ。韓国の選手はフィジルルが強い、日本の選手はスキルが高い、そのようなことは実際に一緒にやってみないとわからない。チェ・ヨンス選手やキム・ドフン選手など、Jリーグの評価は高い。日本の選手もそのような経験をする方がよいと思う。

後藤:現場では難しいことがたくさんある。 お互いにいいところを学んでいくのが 理想である。別の視点で言えば、日韓 のクラブチームが交流し、対戦する機 会も必要ではないか。

藤口:日本、韓国、中国の東アジアの国々が 交流し、切磋琢磨していくのは重要で ある。しかし、Jリーグ、日本代表、 アジアチャンピオンズリーグ、A3な ど試合の日程を組むのがとても難し い。

反町:現場としてはこれ以上試合を増やすの は大変である。Jリーグでは、プレ シーズンマッチでヨーロッパのクラブ チームと試合を組むことが多い。これ はマーチャンダイジングとして重要で ある。中国のチームと試合を行ったこともあるが、知名度という点で観客を多く集めるのが難しい。ヨーロッパのチームと業務提携をしているJクラブもあるが、アジアのチームと提携するという選択肢もある。

李 : スポーツだけではなく、日韓中の経済 的な交流も必要である。経済が発展す るとスポーツも発展していく側面があ る。その流れを踏まえて、これから協 力しながら是非ワールドカップで優勝 できるようなチームになってほしい。

藤口:日韓ではトップの交流だけではなく、 下部組織(U-18など)のチームが頻 繁に交流している。この前もU-13の チームが韓国で合宿し、試合を行った。

後藤:最後に一言

藤口:日韓お互いが切磋琢磨して、世界の トップテンに入れるようになればよい と思う。

反町:私たちは常に韓国を意識してきた。一緒に現役時代を過ごした韓国選手との交流もいまだに続いている。お互いの交流を深め、刺激し合い、東アジアだけでなく、世界の舞台で活躍できるようになり、いつかワールドカップの決勝で対決できればいいと思う。

李 : 慶應義塾大学、延世大学の出身者たちがそれぞれの出身であるというプライドを持って社会に出て、社会に貢献できるような人材になってほしい。

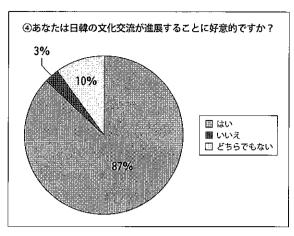
5. シンポジウムアンケート調査集計結果

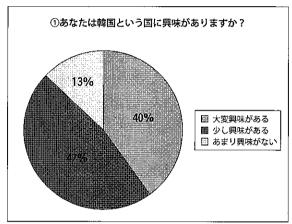
企画運営担当学生

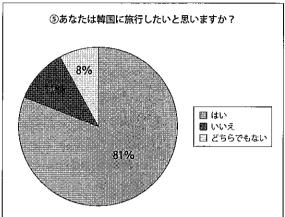
石川 徹(法学部法律学科2年)

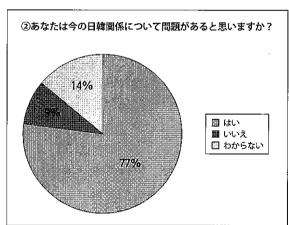
調査実施日:平成17年12月15日(木)

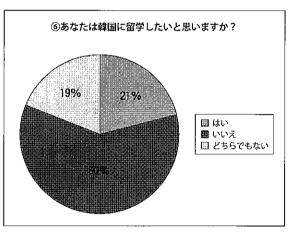
回答者数:80名

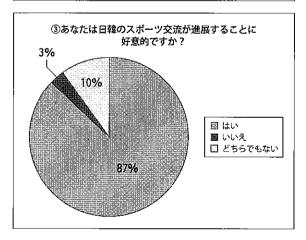


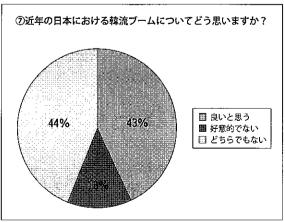


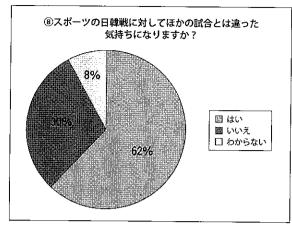


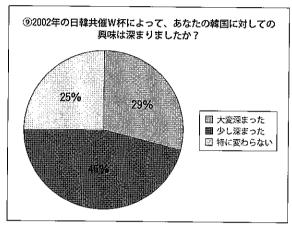




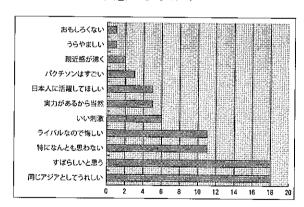








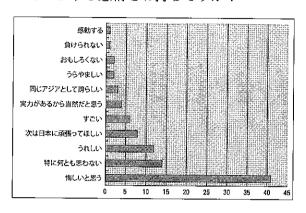
⑩韓国人のスポーツ選手が世界的に評価されることをどう思いますか?



この質問では大きく分けてこのような回答になった。悔しいなどの否定的な意見よりも、アジア人として嬉しいや純粋にすばらしいという意見のほうが断然多い。また、悔しいと答えた人の中にも、喜ばしいと思うが正直悔しい気持ちもあるというような意見も多く含まれていた。この他にも、日本人と引き合いに出されることには腹が立つという意見や、

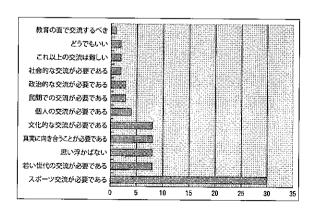
アジアのサッカーを世界にアピールできるの で喜ばしいという意見もあった。

①韓国代表チームがワールドカップで日本よりも良い成績を収めたとしたら、あなたはどのような感情をお持ちですか?



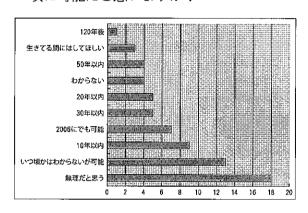
この質問では悔しいと思うと答えた人が圧倒的に多い結果となった。前の質問では悔しいよりもすばらしいと思うという意見のほうが多かったが、この質問は逆であった。やはり国を代表するチームとしては絶対に負けたくないと思う気持ちが全体的に強いようである。眠れないほどムシャクシャするという意見などもあり、また一方では、韓国はフランス大会までに8度もワールドカップに出場しているし、日本よりも良い成績を収めても不思議なことではないという意見もあった。

②今年は日韓国交回復40周年ですが、日韓関係はさらに深めるべきだと思いますか?また具体的にどのように交流していくべきだと思いますか?



具体的な交流としてはスポーツ交流が必要と感じる人が大変多く、J1優勝チームと K リーグ優勝チームの対戦が見たいなどの意見もあった。その他には在日を同胞として受け入れなければならないという意見、戦争を経験した人が生きていない時代になれば、政治的、社会的に交流はどんどん深まっていくだろうという意見もあった。

③日本と韓国がワールドカップで優勝することができると思いますか?またそれはいつ頃に可能だと思いますか?



日本と韓国が世界一になれるかという質問に対して、無理であると解答した人は全体の約2割だった。その他はできると信じている人であり、サッカーは何が起こるかわからないスポーツなので、次のワールドカップに可能や10年以内に可能という意見もなかなか多くあった。また、日本よりも韓国のほうが先に優勝すると考える人も多いことがわかった。その他では日本人選手、韓国人選手がもっとたくさんヨーロッパのチームでプレーするようにならないという具体的な意見もあった。

⑩シンポジウムで1番印象に残った話と今日の感想をお願いします。

シンポジウムで1番印象に残った話は反町 さんのレフリーのジャッジに対するお話だっ たという人が多数いた。他にも、反町さんの Jリーグの現場でのいろいろな話や、藤口さんのサッカー協会の裏話に対する人気が非常に高く、全般的に第2部の対談のほうが印象に残ったようである。しかし、小針先生の日本と韓国のお互いの国の人がそれぞれお互いの国に間違った解釈をしている傾向があるというお話に興味を持った人も多く見られた。これをきっかけに自分の間違った解釈を改めることもでき、今後自分の中で韓国の見方やイメージが変わっていきそうだという人もいた。

また、ヨーロッパが EU という組織によってスポーツや文化的交流を深め、さまざまな発展を遂げたのを見習い、日本や韓国、アジア諸国がアジア規模での共同体をつくりそれを通してお互いを理解しあい、交流を深められたらいいという意見も多く見られた。最後にこのシンポジウムを通して日韓関係を考え直そうとする動きも見られたように思う。

Ⅱ. 研究活動記録

		·	
			·

1. 個人研究業績·教育業績·研究助成

植田 史生(教授)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- •全日本学校剣道連盟 常任理事, 通年
- ・第45回全日本教職員剣道大会 審判副主任,2005.8
- ・南ドイツ剣道連盟 夏季稽古会 剣道講師, 2005.9

高嶺 隆二(教授)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・神奈川県体育協会 生涯スポーツ委員会委員, 2005.4-2006.3
- ・横浜市体育協会 市民スポーツ委員会委員長、2005.4-2006.3
- ・横浜水泳協会会長, 2005.4-2006.3

近藤 明彦(教授)

学会発表等

- Kondo A. Re-envisioning education -Keio university's approaches to the problems of Japanese liberal arts at university level-. International conference, Liberal education in Korea -Challenges and prospects-, Seoul national university, Korea, 2005. 4
- Mizuochi F, Fukami K, Kondo A. Cortisol and chromogranin A levels in saliva of athletes before a competition.
 ISSP 11th World Congress of Sport Psychology, Sydney, Australia, 2005. 8

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・日本スポーツ心理学会 理事,通年
- · International Society of Sport Psychology, Managing Council Member,通年
- · International Journal of Sport and Health Science, Section Editor (Psychology), 通年

安藤 勝英(教授)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・米国カリフォルニア州立サンノセ大学柔道指導,2006.2-3
- 塾体育会柔道部師範, 通年
- ·東京学生柔道連盟理事, 通年

佐々木玲子 (教授)

著書・論文・報告書

- ・清水靜代,村岡慈歩,西田ますみ,大森芙美子,鈴木育夫,岡田知雄,佐々木玲子,加賀谷淳子.幼児期 における調整力の発達と身体活動量との関係.慶應義塾大学体育研究所紀要.45(1):1-6,2006.
- ・佐々木玲子. 跳ぶ動作の発達. 子どもと発育発達. 3-3:182-184, 2005.
- ・佐々木玲子. からだの感覚 (社中交歓). 三田評論. No. 1078: p. 73, 2005.
- ・森下はるみ編著. 「指導のてびき 理論編」社団法人 日本 3B 体操協会(執筆協力), 2005.
- ・「からだを動かしてみよう」月刊ポプラディア10月号, pp22-23 (取材協力), 2005.

学会発表等

・佐々木玲子. 子どもの反応時間課題における両側性低下. 第56回日本体育学会, 茨城, 2005.11

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・財団法人 日本プロスポーツ協会「スポーツ有効活用事業・指導者講習会」講師 「発育発達期とスポーツ」 2005. 11. 13

- ・社団法人 日本ダンススポーツ連盟「公認ダンススポーツコーチ専門科目講習会」講師 「バイオメカニクス」 2006.1.7
- ・財団法人 日本体育協会公認コーチ養成講習会集合講習会講師 「トレーニング論Ⅱ」2005.8.14
- ・子どもの体力向上推進事業 ダンスエクササイズ「アイーダアイダ」講習会 講師. 2005.5-8 (神奈川, 東京, 茨城, 大阪)
- ・日本バイオメカニクス学会 機関紙「バイオメカニクス研究」編集委員、通年
- ・日本発育発達学会 「子どもと発育発達」編集委員, 通年
- ·比較舞踊学会理事,通年
- · 社団法人 全国大学体育連合 将来検討特別委員会 委員, 通年
- ・文部科学省委託 子どもの体力向上キャンペーン事業におけるダンスエクササイズ普及のためのプロジェクトメンバー、通年
- ・財団法人 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会「幼年期に身に着けておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究」研究班員、通年

研究助成等

・映像による即時フィードバックを用いた運動学習システムの開発 慶應義塾学事振興資金(共同) 110万 円

綿田 博人(教授)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・マルチメディア慶友会 講師派遣 「プロ野球の改革について」、2005.12

松田 雅之(助教授)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・関東学生陸上競技連盟 評議員 ドーピング対策委員, 2005.4-2007.4

石手 靖(助教授)

著書・論文・報告書

・西村 忍,村松 憲,清水靜代,加藤幸司,<u>石手 靖</u>. 慶應義塾大学体育実技履修希望者を対象とした簡 易体力測定『体力番付』に関する報告. 慶應義塾大学体育研究所紀要,45(1):13-17,2006.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・日韓共同スポーツ文化交流を通した教養教育の実践,平成17年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」 慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 企画運営及びシンポジウム司会, 2005.12
- ・バレーボール学会第11回研究大会実行委員長及びシンポジウム司会,2006.3

研究助成等

・日韓共同スポーツ文化交流を通した教養教育の実践,平成17年度日吉キャンパス「予算管理部門内調整費」 慶應義塾大学教養研究センター企画「新しい教養教育の支援」事業 事業代表者 601,220円

村山 光義(助教授)

学会発表等

- ・内山孝憲,大杉健司,村山光義.押し込み反力計測による筋の硬さの評価―等尺性収縮力依存性と筋疲労の影響―.第19回バイオメカニズムシンポジウム,三重,2005.8
- ・<u>村山光義</u>,米田継武,河合祥雄、一過性筋疲労時の筋硬度変動の要因、第60回日本体力医学会、岡山, 2005.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・順天堂大学スポーツ健康科学部スキー実習 講師 2006.2

研究助成等

- ・循環要因が筋疲労時の筋硬度変化に及ぼす影響 文部省科学研究費(若手研究 B),50万円
- ・随意的収縮中の筋硬度と筋の羽状角の関係について 慶應義塾学事振興資金(共同),74万円
- ・超音波装置を用いた塾生の身体組成に関する研究 慶應義塾学事振興資金(共同),86万円
- ・映像による即時フィードバックを用いた運動学習システムの開発 慶應義塾学事振興資金(共同),110万円

当年中の研究教育活動の概要

平成17年度中は筋硬度変動の生理学的意義に関する継続研究に加え、研究所内の共同研究(塾生の形態計測および映像機器を用いた技術指導法の開発)に着手しデータを蓄積することができた。また、教養研究センターの基盤研究プロジェクトに参加し、塾の教育カリキュラム研究の幹事として主に成績評価方法に関する調査を進めた、本年度のデータ蓄積から次年度の成果報告につなげる予定である。

山内 賢(助教授)

著書・論文・報告書

・市河 勉, 山内 賢, 原田昌信. 高齢者の体力測定システムの開発(その1)~ ADL 活動力測定・評価器の試作報告~. 松山東雲短期大学研究論集, 36:101-10, 2005.

学会発表等

・山内 賢. 高齢者の体力測定システムの開発〜測定器の試作〜. 日本スポーツ方法学会第17回大会, 兵庫, 2006.3

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・日本体育学会体育方法専門分科会世話人, 通年

研究助成等

・生活活動力テストの開発 慶應義塾学事振興資金(個人研究A) 20万円

吉田 泰将(助教授)

著書・論文・報告書

· 吉田泰将, 伊藤元明他 共著. 剣道医学 第2版. 財団法人全日本剣道連盟, pp32-35.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ·全日本学生剣道連盟総務委員会委員, 通年
- ・全日本学生剣道連盟 審判員. 通年
- 関東学生剣道連盟将来構想委員会委員、通年
- ·全日本学連劍友会事務局, 通年
- · 関東学連剣友連合会事務局, 通年
- ・慶應義塾体育会剣道部 (三田剣友会) 助教, 通年
- · 慶應義塾大学医学部体育会剣道部 師範代行, 通年

当年中の研究教育活動の概要

国際剣道連盟の GAISF 加盟問題について、2005年の理事会・総会で否決された原因を調査したが、2006年4月の総会で可決・承認を受けた、そこで今後、国際剣道連盟加盟国の本国における待遇について、その変化を調査したいと考えている。また、これを契機にオリンピック種目にとの声も再燃する可能性があるため、国際情勢を見極めて、今後の剣道界の進む方向を考えたい。

加藤 大仁(助教授)

学会発表等

・加藤大仁. 「スポーツ振興くじ法」の立法過程. 日本スポーツ方法学会第17回大会, 兵庫, 2006.3

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・Pete Newell's Tall Women's Basketball Camp コーチング・スタッフ カリフォルニア (USA) 2005.7 **研究助成等**
 - ・スポーツ政策に関する基礎的研究 慶應義塾学事振興資金(個人研究 B) 20万円

野口 和行(専任講師)

著書・論文・報告書

・日本キャンプ協会指導者養成委員会. 市村小百合, 清水幸一, 翠尾由美, 時安和行, 富山浩三, <u>野口和行</u> (編). キャンプ指導者入門. 日本キャンプ協会. 239, 2005.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・(社) 日本キャンプ協会 専門委員. 通年
- ·(財)日本教育科学研究所 研究員,通年
- ・(社)日本キャンプ協会 キャンプディレクター2級養成講習会 講師,2005.6
- ・独立行政法人国立妙高少年自然の家 東日本地区ボランティア資質向上研修 講師, 2005.9
- ・(財) 日本教育科学研究所 アウトドアゲーム指導法講習会 講師、2005.10
- ・(社) 日本キャンプ協会 キャンプディレクター1級養成講習会 講師,2005.11
- ・独立行政法人国立オリンピック記念青少年総合センター 青少年自然体験活動全国フォーラム,講師 2006.2

当年中の研究教育活動の概要

キャンプ指導者養成カリキュラム改定に関わり、指導者用テキストを執筆した.

須田 芳正 (専任講師)

学会発表等

- ・岡本孝教,大嶽真人,依田珠江,<u>須田芳正</u>,安松幹展,李ウヨン.大学生のフットサル強化・普及について.第3回日本フットボール学会,埼玉,2006.1
- ・大嶽真人, 依田珠江, <u>須田芳正</u>, 安松幹展, 岡本孝教, 李ウヨン. フットサルの運動特性. 第3回日本フットボール学会, 埼玉, 2006.1
- ・佐久間淳, 大嶽真人, <u>須田芳正</u>, 李ウヨン. フットサルにおけるシュートと得点. 第3回日本フットボール学会, 埼玉, 2006.1

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・慶應義塾体育会ソッカー部監督 2005.4-2006.3
- ・日本フットサル連盟理事 2005.4-2006.3
- ・NHK テレビスポーツ教室「フットサル戦術編」講師 2005.5

研究助成等

・世界のフットサル戦術についての研究 慶應義塾学事振興資金(個人研究 B) 20万円

村松 憲(専任講師)

著書・論文・報告書

- Takeshita D, Shibayama A, Muraoka T, <u>Muramatsu T</u>, Nagano A, Fukunaga T, Fukashiro S. Resonance in the human medial gastrocnemius muscle during cyclic ankle bending exercise. *J Appl Physiol* (in press).
- Muraoka T, Chino K, <u>Muramatsu T</u>, Fukunaga T, Kanehisa H. In vivo passive mechanical properties of human gastrocnemius muscle belly. *J Biomech* 38(6):1213–1219, 2005.
- Muraoka T, Muramatsu T, Fukunaga T, Kanehisa H. Elastic properties of human Achilles tendon are correlated to muscle strength. *J Appl Physiol* 99(2):665–669, 2005.
- Muraoka T, Muramatsu T, Kanosue K, Fukunaga T, Kanehisa H. Influence of long-term Kendo training on

the geometric and mechanical properties of the Achilles tendon. Int J Sport Health Sci S3:304-310, 2005.

- ・日本テニス協会編. 新版テニス指導教本 (執筆担当箇所:第3章「基礎技術の連続写真」), 大修館書店, 2005.9
- ・西村 忍,<u>村松 憲</u>,清水靜代,加藤幸司,石手 靖. 慶應義塾大学体育実技履修希望者を対象とした簡 易体力測定『体力番付』に関する報告. 慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1):13-17, 2006.

学会発表等

- Muraoka T, Tachi M, Ushiyama J, Muramatsu T, Fukuoka H, Fukunaga T, Kanehisa H. Effect of 20 days of bed rest on passive mechanical properties of human gastrocnemius muscle belly. XXth Congress of the International Society of Biomechanics. Cleveland, USA, 2005, 8
- ・久保潤二郎, 村松 憲, 立 正伸, 中村夏実, 岩本陽子. 競技選手を対象とした皮下脂肪蓄積パターンに 及ぼす体脂肪率と性差の影響. 体力科学. 54(6):543, 2005.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・財団法人 日本オリンピック委員会 強化スタッフ (医・科学スタッフ), 2005.4-2006.3
- ・財団法人 日本テニス協会 スポーツ科学委員, 2005.4-2006.3
- ・公認上級コーチ養成講習会専門科目講師(テニス), 2005.12
- ・科学研究費補助金取得勉強会講師(大学教養研究センター,日吉研究支援センター主催) 2005.10.3
- ・日本テニス学会 運営委員 (審査担当兼編集委員), 2005.4-2006.3

研究助成等

・超音波装置を用いた塾生の身体組成に関する研究 慶應義塾学事振興資金(共同研究)86万円

加藤 幸司(専任講師〔有期〕)

著書・論文・報告書

- ・<u>加藤幸司</u>,大西祥平. 間欠的運動時の局所骨格筋酸素動態の検討. 慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1): 7-12, 2006.
- ・西村 忍,村松 憲,清水靜代,加藤幸司,石手 靖. 慶應義塾大学体育実技履修希望者を対象とした簡 易体力測定『体力番付』に関する報告. 慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1):13-17, 2006.

学会発表等

・<u>加藤幸司</u>,大西祥平. 間欠的運動時の筋酸素動態と血中乳酸濃度について. 第60回日本体力医学会,岡山, 2005. 9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・平成17年度財団法人日本バドミントン協会 公認コーチ(バドミントン2級)養成講習会後期専門科目講習会,講師 2006.1.7

研究助成等

・間欠的運動時の局所骨格筋における酸素化レベルの測定と検討 慶應義塾学事振興資金(個人研究)10万 円

清水 靜代(専任講師〔有期〕)

著書・論文・報告書

- ・清水靜代, 村岡慈歩, 西田ますみ, 大森芙美子, 鈴木育夫, 岡田知雄, 佐々木玲子, 加賀谷淳子. 幼児期 における調整力の発達と身体活動量との関係. 慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1):1-6, 2006.
- <u>Shimizu S</u>, Muraoka Y, Omori F, Kagaya A. Relationship between cardiac muscle, skeletal muscle mass and vessel structure in elderly women. *Jap J Physical Fitness Sport Med* (in press).
- Shimizu S and Kagaya A. Blood flow in common carotid artery during handgrip exercise at different forearm position. *J Exerc Sci* (Accepted).
- <u>Shimizu S</u>. Cardiac output during exercise and distribution of blood flow into various vessels. Integrative study of circulatory regulation during exercise; contribution to developing optimal program for health

- promotion and physical fitness through sports and exercise. Academic Frontier Project at JWCPE, pp40-43, 2004.
- Kagaya A and Shimizu S. Circulatory Functions to Maintain High Quality of Life in Elderly. *Int J Sport Health Sci* 4:1–12, 2006.
- Tanaka H, Shimizu S, Ohmori F, Muraoka Y, Kumagai M, Yoshizawa M, Kagaya A. Increases in blood flow and shear stress to nonworking limbs during incremental exercise. *Med Sci Sports Exerc* 38:81–5. 2006.
- Ohmori F, Shimizu S, Muraoka Y, Matsuda, Kuno S, Kagaya A. Blood flow during graded, submaximal static handgrip exercise at different intensities in elderly and young women. *Int J Sport Health Sci* (in press).
- Muraoka Y, Shimizu S, Fukunaga T, Nishijima T, Kuno S, Mastuda M, Kagaya A. Relationship between forearm muscle volume and pressure response during static handgrip in elderly women. *Int J Sport Health Sci* (in press).
- ・大森芙美子, <u>清水靜代</u>. 血管拡張能を高める運動トレーニングの条件. デサントスポーツ科学. 26.203-211.2005.
- ・西村 忍,村松 憲,<u>清水靜代</u>,加藤幸司,石手 靖.慶應義塾大学体育実技履修希望者を対象とした簡 易体力測定『体力番付』に関する報告.慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1):13-17, 2006.

学会発表

- Shimizu S, Muraoka Y, Ohmori F, Kagaya A. Relationship between cardiac muscle, skeletal muscle mass and vessel structure in elderly women. The 8th Asian federation of sports medicine congress. Tokyo, 2005. 5
- ・<u>清水靜代</u>, 大森芙美子, 久野譜也, 松田光生, 加賀谷淳子. 高齢者における掌握運動時の血圧と筋酸素化 動態との関係. 第56回日本体育学会大会, 茨城, 2005. 11
- ・<u>清水靜代</u>,大森芙美子,熊谷真奈,加賀谷淳子.上腕静脈血流速度パラメータに及ぼす掌握運動の強度の 影響. 第13回日本運動生理学会,東京,2005.7
- Kumagai M, Shimizu S, Kagaya A. Insufficient blood supply to exercising muscles at high intensity accelerates muscle deoxygenation. The 8th Asian federation of sports medicine congress, Tokyo, 2005. 5
- Yoshizawa M, Shimizu S, Kagaya A. Changes in brachia and femoral artery vascular conductance in nonexercising limbs during handgrip exercise. The 8th Asian federation of sports medicine congress, Tokyo, 2005. 5
- Ohmori F, Shimizu S, Hamaoka T, Kagaya A. Blood flow after contraction of short duration reaches its peak by 3rd cardiac cycle. The 8th Asian federation of sports medicine congress, Tokyo, 2005. 5
- Muraoka Y, Ohmori F, Shimizu S, Itakura H, Akama T, Nakamura I, Kagaya A. Effect of thigh muscle thickness on daily physical activity and active range of dorsiflexion in elderly men. The 8th Asian federation of sports medicine congress, Tokyo, 2005. 5
- ・大森芙美子、<u>清水靜代</u>,村岡慈歩,久野譜也,松田光生,加賀谷淳子. トレーニングは高齢者の加齢に伴 う血圧急上昇負荷の低下を抑制する— SAT プロジェクト 189 —. 第 56 回日本体育学会大会,茨城, 2005. 11
- ・大森芙美子, <u>清水静代</u>, 浜岡隆文, 加賀谷淳子. 動的足底屈運動トレーニングにおける2種の動作間隔が 運動時血流量に与える効果の相違. 第60回日本体力医学会大会, 岡山, 2005.9
- ・吉澤睦子,<u>清水靜代</u>,菅原 順,加賀谷淳子.片脚膝伸展運動中の非活動肢血流動態と呼吸交換比の関係. 第60回日本体力医学会大会,岡山,2005.9

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・(財) 東京都生涯学習文化財団「体育の日 記念行事 新体力テスト」実技指導員, 2005.10

研究助成等

- ・運動時における循環調節機構の統合的解明—スポーツによる健康・体力づくりプログラムの構築に向けて— (代表 加賀谷淳子) 文部科学省学術フロンティア推進事業(平成16-20年度)
- ・身体活動量の違いが末梢血管の形状および機能に及ぼす影響 平成17年度慶應義塾学事振興資金(個人研究B) 20万円

西村 忍(助手〔嘱託〕)

著書・論文・報告書

・<u>西村</u> 忍,村松 憲,清水静代,加藤幸司,石手 靖. 慶應義塾大学体育実技履修者を対象とした簡易体力測定『体力番付』に関する報告. 慶應義塾大学体育研究所紀要. 45(1):13-17, 2006.

学会発表等

- Osanai H, Nishimura S, Nakao Y, Sakurai T, Ito T. The Change of Autonomic Nervous Activity after Isokinetic Exercise. The 8th Asian Federation of Sports Medicine Congress 2005, Tokyo, 2005. 5
- ・清水美樹, 西村 忍, 中尾陽光, 岩噌弘志, 中里浩一, 中嶋寛之. 大学女子チアリーダーにおけるポジション別損傷比較. 第60回日本体力医学会, 岡山, 2005.9
- ・<u>西村</u> 忍. 大学体育実技クラス履修者の身体的特性について一高校3年間の体育会部活動の影響一. 第60 回日本体力医学会, 岡山, 2005.9
- ・<u>西村 忍</u>,中嶋寛之.足関節内側靭帯・遠位脛腓靭帯複合損傷に対する装具の研究—大学アメリカンフットボールパワーポジションの選手を対象として—.第19回日本靴医学会,東京,2005.10

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

・慶應義塾体育会アメリカンフットボール部ユニコーンズ ヘッドトレーナー, 2005.2-

研究助成等

・体育実技クラス履修者における健康関連体力測定と筋腱柔軟性テストの導入について 慶應義塾学事振興 資金(個人研究) 20万円

当年中の研究教育活動の概要

昨年度より体育実技クラス履修者を対象とした健康関連体力・筋腱柔軟性・関節弛緩性に関する研究を行っている、平成17年度はそれに関する発表を行った。

牛山 潤一(助手〔嘱託〕)

著書・論文・報告書

- <u>Ushiyama J</u>, Masani K, Kouzaki M, Kanehisa H, Fukunaga T. Difference in aftereffects following prolonged Achilles tendon vibration on muscle activity during maximal voluntary contraction among plantar flexor synergists. *J Appl Physiol* 98:1427–1433, 2005.
- Wakahara T, <u>Ushiyama J</u>, Kawakami Y, Kanehisa H, Fukunaga T. Effects of passive ankle and knee joint motions on the length of fascicle and tendon of the medial gastrocnemius muscle. *Int J Sport Health Sci* 3:75–82, 2005.

学会発表等

- <u>Ushiyama J</u>, Masani K, Kouzaki M, Fukunaga T, Kanehisa H. Recovery time course of muscle activity after prolonged Achilles tendon vibration differs between medial and lateral heads of the gastrocnemius muscle. The 35rd Annual Meeting Society for Neuroscience, Washington D.C., USA, 2005. 11.
- Muraoka T, Tachi M, <u>Ushiyama J</u>, Muramatsu T, Fukuoka H, Fukunaga T, Kanehisa H. Effect of 20 days of bed rest on passive mechanical properties of human gatrocnemius muscle belly. International Society of Biomechanics, Cleveland, USA, 2005. 8.
- ・<u>牛山潤一</u>,政二 慶,神﨑素樹,福永哲夫,金久博昭.アキレス腱への長時間振動刺激後にみられる随意 最大収縮力低下の回復過程とその要因に関する考察.第60回日本体力医学会,岡山,2005.9.
- ・笹川 俊、<u>牛山潤一</u>, 栗原俊之, 神﨑素樹, 福永哲夫, 金久博昭. 静止立位姿勢制御における下腿三頭筋の貢献. 第33回日本体育学会東京支部学会大会, 東京, 2006.3. (東京体育学奨励賞受賞)

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・順天堂大学生理学ゼミナール 特別講演 「腓腹筋の筋線維長変化がヒラメ筋 H 反射に及ぼす影響」 2005.7
- ・お茶の水女子大学水村ゼミナール 特別講演 「アキレス腱への長時間振動刺激後にみられる随意最大収縮力低下の回復過程とその要因に関する考察」 2005.9

研究助成等

・力発揮中のヒト運動単位の動員様式は協働筋間で異なるか? 慶應義塾学事振興資金(個人研究 B) 20 万円

当年中の研究教育活動の概要

平成17年度は結果的に、博士論文執筆後の次のステップへの基盤作りに費やした1年であった。なかなか前に進むことが出来ず、反省点も多々あるが、Society for Neuroscience において当該分野の研究者との数多くディスカッションし、博士課程在籍時より継続して行っている機械的振動刺激法を用いた神経生理学的研究の課題を浮き彫りに出来たことが収穫であった。

平成18年度は、1)昨年来執筆し続けている論文を何とか投稿・受理まで持っていくこと、2)上記課題を少しでも前に進め、来る9月の体力医学会のプレコングレス「筋電図の会」(本年度演者に決定)に備えること、3)プロジェクト研究をベースに新たに姿勢制御に関する研究に取り掛かり、塾生の姿勢保持能力評価の指標を構築すること、を目標に努力精進していきたい。

2. 所内定例研究会発表要旨

第1回 4月12日

村山 光義

筋硬度変化の生理学的要因について

(特別研究期間研究成果報告)

筋の硬化現象は、古くから観察され、筋疲労・障害の診断や予防・運動能力に関わる指標として期待されてきた。しかしながら、その生理学的要因に関する基礎的検討が不足しており、スポーツ科学分野において筋硬度は未だに一般的な指標として確立されていない。発表者は、平成16年度慶應義塾特別研究期間を利用し、この課題に重点的に取り組み、本研究課題で平成16年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科博士論文も提出した。そこで、筋硬度変化の生理学的要因として確認された筋線維要因と循環要因の概略について以下のように報告した。

【目的】

本研究の第1の目的は、筋硬度と筋線維および循環における生理学的変化の関係を明らかにし、第2の目的は、筋硬度計測の意義について検討することである。

【方法】

筋硬度計測には押圧法を用いた。ヒトにおける疲労運動後の血流量と筋硬度関係、蛙摘出筋を用いた筋張力および筋損傷と筋硬度の関係について実験を行い、筋硬度変化の生理学的要因を検討した。

【結果および考察】

ヒトにおける反復性筋収縮後の腓腹筋の筋硬度は、血流量変化に対応した変化を示した。この結果は、一過性筋疲労後の筋硬度増加に組織容積の増大が強く関係することを示唆する。一方、摘出筋を用いた筋硬度に対する筋線維要因の影響を調べる実験では、筋硬度が筋の受動的張力と収縮張力に正比例することが示された(Murayama et al. 2005)。このことから、筋のフィラメントの相互作用や筋細

胞骨格の変化に由来する、筋長に対する張力変化(stiffness 変化)が筋硬度の変動要因となることが明らかとなった。また、摘出筋における筋損傷モデル(伸張性収縮相の有無)を用いた反復性筋収縮後の筋硬度比較では、最大強縮力の40% 負荷条件の筋損傷モデルでのみ筋硬度は増加し、他の条件ではむしろ減少を示した。つまり、収縮時の機械的作用に対する筋線維実質の変化によっても筋硬度が変化する可能性が認められた。

【結論】

筋硬度変動の生理学的要因として、筋線維要因と循環要因が確認された。つまり、筋硬度は、筋と筋腱複合体の機械的特性の変化および組織容積の変化を反映する。このことから、筋硬度は運動による機械的刺激によって生じる筋線維実質の損傷程度と運動後の回復過程に関わる循環の変化を評価する指標としての意義を持つと考えられる。

山内 賢

高齢者における生活活動力テストの開発

高齢者の身体の健康を考えるときに、健康 関連や生活に最低限必要な体力を維持することにその意義を感じる。高齢者の生き生きと した質の高い生活と自立のために、これま で、市町村単位でも、さまざまな健康教室は 開かれている。その効果は認められるもの の、教室を体験した後の機能効果を評価する システムが大掛かりであることは懸念の材料 である。

2005年に介護保険制度の改正、2006年4月から、介護保険制度改正おけるテーマの一つである介護予防の具体的な実施が始まる。そこでこれを期に私は、携帯性に優れ、家庭でも簡便に何らかの体力測定ができる機器の開発・研究が必要であると考えた。今回の機器のイメージとしては、単なる測定器ではなく、ゲーム感覚で運動・作業能力に評価を与えられるといった機能をデザインしてみた。

【開発の内容】

測定装置として、各要素に共通する測定器本体と拡張測定装置としての歩行、手腕作業能力測定に関する各要素の測定方法及び測定センサー(スイッチ)の開発を試みた。なお、各測定要素機器は可搬型にするため、軽量で組み立てやすい構造を基本デザインとした。【研究の方向性】

今回は、2項目(歩行、手腕作業能力)の 測定機器開発に期をとどめるが、他の項目に 関しても、測定センサー機器を工夫して行え るように開発を中長期的に考えている。また、 「開発した測定器を用いて高齢者の活動力テ ストを行い、体力の基準値をつくる」、さら に、「福祉3分野といわれる子供、高齢者、 障害者の体力を測定する方法を模索して行き たい」と考えている。

【結果】

- ・測定器の親機の試作品の完成。
- ・スイッチの試作品(2種:ボタンスイッチ とマットスイッチ)の完成。
- ・パソコンへのデータ転送を可能にした。

Windows ソフトハイパーターミナルを利用してソフトエクセル上での統計処理を行える。

(測定の例)

1) 歩行能力

障害物 5 個を 2 m 間隔で立てる。

- ①スタートライン直前のマットの後ろに立 ち、マットを踏んでスタートする。
- ②各障害物を迂回しながらジグザグに歩行 してできるだけ早く歩く。
- ③ゴールライン(スタートラインと同じ) 直後のマットを踏むまでの時間を測定す る。2回実施し、速い方のタイムを記録 として採用する。

2) 手腕作業能力

縦5個2列のボールを入れる枠が左右対称にある専用台(互いの間隔は40cm)を使い、専用台の左側にボールを10並べる。

- ①卓上のスタートスイッチを押してスタートする。
- ②スタートとともに両手で左枠内のボール (10個)を右側の枠内に移動する。
- ③終わったら、同じように左の枠内にボールを戻す。
- ④戻し終わったら、卓上のスイッチを押す。 2回実施し、速い方のタイムを記録とし て採用する。
- ※ボールは、滑りにくく、重量のあるゴルフボールを使用する。

第2回 5月17日

西村 忍

大学アメリカンフットボール選手における足 関節靱損傷と身体的特性およびポジション特 性との関係について

内側靭帯複合損傷(以下 MALC 損傷)の 受傷機序は、過度の外がえしや足関節部の過 度の外旋などが挙げられる。この損傷は、ア メリカンフットボール(以下アメフト)にお いては、その発生の割合が高く、またその治 療期間は、前距腓靭帯や踵腓靭帯などの外側 靭帯複合損傷(以下 LALC 損傷)と比較して 明らかに長い期間を要するため、事前の予防 措置が重要となる。そこで本研究は、大学ア メフト選手を対象とし MALC 損傷と身体的 特性・ポジション特性との関係、および環境 的要因との関係を検討するとともに、その損 傷を予防する方法を明らかにすることを目的 とした。

1. 大学アメフト選手における足関節靭帯損 傷と身体的特性、ポジション特性、および 環境的特性との関係。

被検者は大学アメフト選手53名とし、アメフト競技中に引き起こされた足関節靭帯損傷について調査し、(1)LALC損傷群、(2)MALC損傷群、(3)捻挫なし(以下 NAS損傷)群の3つに分類し検討した。その結果、MALC損傷は全体の35%を占めた。さらに、

MALC 損傷群は、LALC 損傷群や NAS 損傷群と比較して、体重が有意に重くかつ BMI が有意に大きかった。また、オフェンスライン(以下 OL)/ディフェンスライン(以下 DL)/ラインバッカー(以下 LB)における MALC 損傷の発生率は 75%と最も高値であった。このように、MALC 損傷は OL/DL/LB のポジション特性による損傷傾向があることが示唆され、体重・BMI が有意に大きい選手に多く引き起こされる結果となった。

土グラウンドと人工芝グラウンドを1年 ずつ経験した大学アメフト選手39名を被検 者として、アメフト競技中に発生した足関 節損傷について各年度ごとに調査し、比較・ 検討を行なった。その結果、足関節損傷数 において有意な差は見られなかったが、土 グラウンドでは急性外傷、人工芝グラウン ドでは慢性障害などの損傷が多く見られ た。また、全損傷数と下肢における損傷数 においては、人工芝グラウンドでは土グラ ウンドと比較して、損傷が多く引き起こさ れる傾向が見られた。しかしながら、本章 の実験は、調査期間がそれぞれ1年間と短 いことから、継続して調査を行なう必要性 があると思われた。また、人工芝は秋のリー グ戦に使用される頻度が多いため、その環 境での予防対策として足関節装具について 詳しく調査する必要があると思われた。

2. 足関節損傷予防装具の比較研究—X線ストレス撮影、アンケート、そしてパフォーマンステストによる調査—

【客観的調査】

大学アメフト選手47名を被検者として、合計94足の距骨傾斜角(以下TTA)のX線ストレス撮影を以下の5つの状態:(1)lace-on cloth brace (以下 lace-on brace) 着用;(2)semi-rigid orthotic device (以下 semi-rigid orthosis) 着用;(3)ankle taping;(4)筆者が作成したoriginal ankle brace (以下 original brace) 着用;(5)

素足で 15kg の内・外反ストレスをそれぞれ 負荷した時に行った。また、被検者47名94足 を(a)全体群94足、(b) LALC 損傷群17足、(c) MALC 損傷群18足の3グループに分類し検討 を行った。その結果、全体群において多重比 較してみると外反ストレスが加えられた時に original brace は他の4つの状態より有意に TTA が小さかった。LALC 損傷群において多 重比較してみると、外反ストレスが加えられ た時に original brace は素足に対して有意に TTA が小さかった。また、MALC 損傷群にお いて多重比較してみると、有意な差が見られ なかった。しかし、original brace と他の4つ の状態をそれぞれ2群間比較してみると、外 反ストレスが加えられた時に original brace はすべての状態に対して有意に TTA が小さ かった。また、ankle taping も素足と比較し て外反ストレスが加えられた時に TTA が有 意に小さかった。

【主観的調查】

上記で述べた(1)~(4)の装具に関するアンケート調査を行なった。記入方法は Visual Analogue Scale を採用し、それぞれの「安定性」と「快適さ」について比較した。その結果、「安定性」と「快適さ」の両方においてankle taping と original brace は、有意にlace-on brace と semi-rigid orthosis に対して高値を示した。また、lace-on brace は semi-rigid orthosis に対してそれぞれ有意に高値を示した。しかし、ankle taping と original brace の間においては、それぞれに有意な差は見られなかった。

【機能的調查】

大学アメフト選手21名を被検者として、40ヤード走とスクエアーランの計測を上記で述べた(1)~(5)の状態で2回ずつ行なった。その結果、すべての状態において有意な差は見られなかった。

これらの調査の総括として、original brace は MALC 損傷を引き起こす外反ストレスに

対して強く、着用時には、「安定性」と「快適さ」に優れ、さらにパフォーマンスへの影響がないことが明らかとなった。

以上の結果より大学アメフト選手、特にOL/DL/LBをポジションとする体重が重くBMIの大きい選手にMALC損傷が多く引き起こされていた。また、グラウンドサーフェイスにより異なった損傷を引き起こすことが明らかになった。これに対しoriginal braceはMALC損傷を未然に防ぐ可能性があることが示唆された。

牛山 潤一

随意最大収縮における筋感覚フィードバック の貢献度は協働筋間で異なる

随意最大収縮(MVC)において、とくに 速筋タイプの運動ニューロンの動員には、ガ ンマ線維とIa群線維からなる環状のフィー ドバック回路(ガンマ環)が必要である (Hagbarth et al. 1986)。一方、筋や腱へ機械 的振動刺激を長時間適用すると、Ia群線 維活動は低下することが知られており (Bongiovanni et al. 1990; Kouzaki et al. 2000), この手法を用いることで随意収縮へのガンマ 環の貢献を調べることが可能となる。本研究 では、アキレス腱へ長時間振動刺激を適用 し、その前後の発揮筋力、ならびに下腿三頭 筋各筋の表面筋電図 (EMG) の変化から、 MVC へのガンマ環の貢献および、貢献度の 協働筋間での相違を検討した。また、各筋の Ia群線維活動が本当に振動刺激によって低 下するかを確認するために、三筋よりH反射 を誘発し、その変化を計測した。結果、H反 射振幅は、刺激後、三筋でほぼ同等に低下し た。このことは、本研究で採用した刺激法が、 三筋のIa群線維活動を均一に低下させ得た ことを示す。一方、発揮筋力は振動刺激後、 -16.6(±3.7)%有意に低下したものの、MVC 時の EMG 平均振幅は、腓腹筋内側頭・外側

頭のみ有意に低下し、ヒラメ筋に変化はみられなかった。この結果は、振動刺激後のIa群線維活動の低下に伴い、速筋タイプの運動ニューロンの動員が困難になったため、相対的に速筋線維を多く有する腓腹筋においてその影響が顕著に現れたことを示唆する。以上より、本研究より得られた知見は、MVCにおいてガンマ環は速筋タイプの運動ニューロンの動因に不可欠であるという Hagbarth et al. (1986)の仮説を支持し、その貢献度はヒラメ筋に比して腓腹筋において高いことが示唆された。(本研究は、Journal of Applied Physiology 2005年4月号に掲載された研究の内容である)

第3回 6月14日

加藤 幸司

バドミントンのスマッシュに関する研究

バドミントンのストロークの中で最も攻撃 性の高いスマッシュについて、3次元映画分 析法を用いて解析し、ラケットアームと頭部 およびラケットヘッドの動きについて報告し た。被験者は大学の男子トッププレーヤー4 名であった。2台の16mm高速度カメラで撮 影スピードを250コマ/秒、露出時間をそれ ぞれ1/1500秒、1/1250秒としジャンピン グ・パワースマッシュを撮影した。分析試技 は11試技であった。各部位の分析結果は、全 被験者に共通した特徴的な動きが認められ た。その主な点は、インパクト時に胴体が ネットに対してほぼ正面を向いていること、 体幹の左腹側への屈曲が見られ、肘および手 首が頭部からかなり離れていること、ラケッ トと前腕および上腕は一直線にはなっていな いことなどであった。これらの点は運動学的 には、肘系を中心にした力のモーメントを獲 得するために、脊柱(体幹)からの距離を大 きく確保しようとして肘を90度近く屈曲させ るために起こる打点の低下を少しでも抑える 合目的的な動きであると解釈された。また従

来の指導によってイメージされていたスウィングとは大きく異なることが示唆され、指導に当たっては十分注意すべきであると考えられた。また発表に対するコメントから、上腕と前腕における捻りの要素の分析、ラケットと身体各部位の速度、加速度等の解析が今後必要であると思われた。

清水 静代

中高齢者における血管形状および機能について

「血液循環の仕組み」を①活動筋量による 相違、②姿勢(重力)変化、③血管形状およ び機能の三つの観点から研究を進めており、 今回の研究会では筋血流量の測定方法および 血管形状の加齢変化について話をさせていた だいた。

【筋への血流量を測る】

筋への血流量を測る方法には侵襲的、非侵襲的ともにいくつかあるが、近年は超音波法を用いて測定されている。超音波法の利点は運動中も測定可能であり、また時間分解能に優れ、短時間の変化にも対応が可能ということである。一方、問題点は測定テクニックの習得が必要、特に、運動中の活動体肢血流量を測定するためには高度なテクニックが必要である。また、超音波法では対象とする筋の血流量ではなく活動部位への血管内の総血流量であり、純粋な筋の血流量ではないということが挙げられる。以上のように利点や問題点はあるが、現時点では血流量を測定する装置としては一般的に幅広く使用されている。

【血管形状の加齢変化】

末梢血管の径は加齢とともに拡大することが知られているが、年齢別にみると特に50歳未満と50歳以上で有意な相違がみられた。すなわち、30-50歳未満の末梢血管は有意に変化しないのに対して、50歳以上では加齢とともに高値を示し、60歳代6.7mm、70歳代7.0mm、80歳代7.4mmを示した。一方、安静時の血圧においても50歳代を境に加齢とと

もに有意に上昇したことから、加齢に伴う安静時の血圧の上昇が、血管径の拡大の一つの要因であると考えた。また、加齢に伴う内中膜複合体厚の増大が、身体活動量を増やすことによって、その増大を抑制する可能性があることを示した。これについては、今後さらに検討していく必要があると考える。

発表に対しいくつかコメントを頂いた。コメントは超音波装置モニタ解像度から数値の取り扱いについて、径の測定は縦断画像からではなく横断画像の方が良いのではないか(村松先生)、高齢者における内中膜複合体のばらつきと日常生活習慣との関係、他世代でのトレーニング効果の検討(牛山先生)等であった。いずれも大変貴重なコメントであり、今後検討していく必要があると考える。

第4回 7月5日

植田 史生

スポーツ障害の経験が自己意識に与える影響 ハーバード大学生を対象として 【対象者】

過去に損傷を負ったことのあるハーバード 大学スポーツ選手38名(男20、女18)。平均 年齢21.3歳。調査内容は、受傷後の状況にお いて重要な要因であるとされるソーシャルサ ポートと対処行動が、その後の自己意識に与 える影響を検討することである。

【自己意識】

自己意識に関わる文章完成法テストにより 測定した。設問は3問からなり、それぞれ"As a college athlete, I am ~"、"Life as an athlete give me ~"、"For my physical fitness, I am ~" である。なお、3問目については自己意識の 中でも自己の身体に対する内容を反映してい ることから、身体認知とした、この文章の後 に記述される内容に関して、本研究者が個別 に評定を行い、ポジティブとネガティブの2 カテゴリーに分類した。 【リハビリテーション過程におけるソーシャルサポート評価尺度】

先行研究等を参考にし、怪我からの復帰に向けたリハビリテーション過程におけるソーシャルサポートに関連した質問項目を8項目作成した。回答は5件法により評定された(1:Never、5:Always)。これらの項目について、主因子解による因子分析(バリマックス回転)を行った結果、3因子が確認され、第1因子:情緒的サポート、第2因子:具体的アドバイス、第3因子:自立心と命名した。【受傷後の対処行動尺度】

先行研究等を参考にし、受傷後の対処行動に関わる質問項目を12項目作成した。回答は5件法により評定された(1:Never、5:Always)。上記尺度と同様の統計処理を行った結果、3因子が確認され、第1因子:自己努力、第2因子:セルフコントロール、第3因子:気分転換と命名した。

【結果と考察】

自己意識 1、2、3 (身体認知)のそれぞれについて、ポジティブ群とネガティブ群別に、2つの尺度における各因子毎の平均得点、標準偏差を算出し、T検定により2群間の比較を行ったが、いずれの因子においても有意な差は認められなかった。

国内調査の結果から、受傷後にとった積極的な対処行動(セルフコントロールと気分転換)と、競技現場に復帰していった体験が、自己意識や身体認知をよりポジティブな方向に促進させていると考えられる。負傷後の積極的な対処行動が、自己意識をよりポジティブな方向に促進させているといった示唆に関して、負傷の程度(重傷、軽傷)との関連を検討した。そのために、対処行動尺度の3因子各々について、平均値より低得点を低群、高得点を高群として分けた。

【まとめ】

すべての分析において、有意な差は認められなかった。データ数が少ないことが主な原

因と考えられる。現在もハーバード大学から データが送られてきている状況であり、継続 してデータの分析をおこない研究を進めたい と考えている。また、障害は損傷と表現する ことと、調査は正式な機関を通し実施したほ うが良いとの指摘を受けた。

吉田 泰将

国際剣道連盟の GAISF 加盟について 【目的】

国際剣道連盟(IKF)は本年4月20日ベルリン(ドイツ)において開催されたGAISF年次総会で加盟に必要な賛成票を得ることができなかった。国際連盟としての仲間入りを望んでのことだったわけだが、今回の失敗の原因がどのような点にあるのかを探り、次回の年次総会での加盟承認を成功させる方策を考えることを目的とした。

【方法】

下記資料の情報を元に問題点と今後の課題を見出した。

- ・月刊剣道時代7月号「GAISF 剣道の加盟を 否決」
- ・月刊剣道時代8月号「ヨーロッパで感じる GAISF 問題」
- ・月刊剣道日本7月号「国際化への第一歩は 早くも足踏み?」
- General Association of International Sports Federations ホームページ
- ・その他 国際剣道連盟及び GAISF 関連の Web 記事

【考察】

日本ではあまりなじみのない GAISF であるが、ヨーロッパ諸国では認知度が高く、GAISF に加盟することで国内のスポーツ省(日本における文部科学省)でのステイタスが上がり、それによって国からの支援を受けられることになる。ハンガリーではAランク(オリンピック種目)、Bランク(国際連盟がGAISF 加盟している種目)、Cランク(それ

以外の種目)となっており、剣道に対する国からの援助は微少となる。

今回の申請の目的には、財政的に運営が苦しい諸国の IKF 加盟団体がそれぞれの国において支援を受けやすくするとともに、KUMDO (韓国の剣道)やテコンドー連盟が主体となって立ち上げた世界剣道連盟に国際的権益を握らせないための予防線とすることがあった。

次回の GAISF 年次総会に向けて、IKF 内に加盟を成功させるためのタスクフォースを結成し、ヨーロッパにおける剣道自体の認知度の向上と「日本の剣道が韓国の剣道と明らかに違うものであり、国際的に普及しているのは日本の剣道である」ということを加盟団体に積極的にアピールすることが急務であると考える。

第5回 10月4日

石手 靖

日本と韓国のスポーツ文化・思想を探る 一韓国の大学スポーツを視察して—

スポーツ文化・体育教育とスポーツ・大学スポーツについて諸外国と比較し検討することは、日本の競技力向上とスポーツの発展に繋がると考えている。今回は韓国の大学スポーツに焦点をあて、2005年9月に開催された韓国、延世大学校と同、高麗大学校との対抗戦を視察し考察を加えた。

両校の体育会にとって最大の目標であるこの対抗戦は、ソウルオリンピック記念競技場他にて開催され、2日間にわたり野球・バスケットボール・アイスホッケー・ラグビー・サッカーの5競技が競われた。両校は韓国の植民地時代に独立運動の先頭に立ち国民に勇気を与えた歴史的背景もあり、両校のスポーツ競技には国民が注目し、常に学生と選手を激励してきた。したがって全国にテレビ中継される程国民の関心事であり約8万人の観衆(約6万人は両校学生)の中、結果は4勝1敗で延世大学校の勝利であった。

一方大学生の中には兵役を終えた者も存在し、応援の雰囲気には日本との違いが感じられた。スポーツ選手に対する国民の意識は国のために戦う軍人と同様に高く、選手自身は大学の代表として戦う意識を常に高く保っている。しかしながらその反面スポーツ中心に大学生活を送る部員にとっては就職問題もあり、まず学生でありそしてスポーツに励む姿勢への見直しも始まっている。このことは日本の大学スポーツを考える上で興味深いことである。

総括として猛烈に盛り上がるこの対抗戦を 観戦し、あらためて若さの発散による一体感 の実現、愛校心の育成、互いの大学の伝統と 誇りを賭けた対抗戦の意義、そして大学の使 命のあり方などを考えさせられた。

佐々木玲子

子どもの反応時間課題にみられる両側性低下 について 一反応時間と発揮出力—

一般に両側の体肢を同時に動かした場合の 発揮筋力や動作時間は、一側の体肢を単独に 用いた場合に比べて力の大きさや反応の速さ は低下する(両側性低下)といわれている。 本研究では、6歳から11歳の子どもを対象 に、グリップ動作を用いての反応時間課題を 行った。音刺激に対する単純反応を、左手、 右手、および両手同時の条件で行い、それぞ れ刺激から動作開始までの時間と反応時に発 揮した最大のグリップ力を測定し、片手と両 手同時条件を比較した。各条件とも約20試行 ずつ行ったが、子どもでは反応時間、グリッ プ力ともに値のばらつきが大きかった。成人 群と比較すると、子どもの反応時間の値に は、顕著な両側性低下がみられず成人とは異 なるものであった。しかしながらグリップ力 の大きさには成人と同様に両側性低下の傾向 がみられた。またこれらの傾向について、本 研究で対象とした子どもにおいては年齢によ る傾向はみられなかった。

反応時間における両側性低下は、左右肢に送るそれぞれの運動コマンドを脳梁を経由して一体化するのに時間がかかり、その処理分だけ反応時間が長くなることによると考えられている。しかしながら左右の大脳半球をつなぐ交連線維が未発達であると考えられる子どもでの本研究の結果はそのことと矛盾し、一側、両側での動作遂行において成人とは異なるメカニズムが働いている可能性が示唆された。

第6回 10月25日 篠原しげ子

ボールルームダンスの骨盤の使い方について

ダンスの指導で難しいところは、示範しながら、言葉で説明しながらでも、体で判ってもらえない。上手く動けないことがある点で、日常あまり意識して使っていない部分を動かす場合に多々遭遇する。その典型的なものとして、骨盤を動かす場合である。

たとえば、ラテンウォークでは、右足全身の場合、左足(軸足)で送って、振り出した右足に体重を乗せたら左足を引き寄せ、右足一本に体重を乗せさらに右の骨盤も腸骨稜の一番高い部分を引き上げながら後ろにねじる。これにつれて左足の親指がターンアウトして外向きになるこれを繋げてヒップムーブメントを作り出す。スタンダード種目でもステップを繋げるときは、出すほうのヒップを軽く上げてから振り出す。フットワーク、スイング、スウェイなどがあるので、この方がスムーズに動ける。

実際に動かすときの感覚は、腸骨稜を軽く 引き上げるのであるが、なかなか出来ない。 ラテンの場合は外側に意識して回しこむ感 覚、内側から外側へ外旋させ、スタンダード では進行方向に向けて引き上げる感じという 説明で、頭で理解できても、実際に動かせな い。ある部分だけを意識して動かすというこ とに慣れていない、経験がない、筋力がない などの理由が考えられる。 骨盤に関連することで、もう一点は、踊っているうちに、相手との間隔があきすぎてくることがある。初心者によく見られることであるが、熟練者は、肋骨の辺りで、付かず離れず、といった感じでコンタクトを取っているが、授業の履修学生には、まだテレもあって無理なので、出来る限り近付いてその間隔をキープするように指示しているが、離れているからであるが、なぜ引けてしまうのか。骨盤の位置が問題になっている。骨盤の仙骨の上の部分をしっかり前に使うと姿勢が、崩れず、間隔も一定に保てる。女性は、男性のリードを受けやすい。しかし、骨盤を垂直に保つのもきついようである。

骨盤も体の一部なので、自由に使えるように、筋肉と神経を働かせて意識して使うことで、思ったとおりに動けるからだ、身体感覚を養って、ダンスを楽しんでもらいたい。

須田 芳正

関東大学リーグ前期の報告

~得点、失点の傾向について~

塾ソッカー部が所属する関東大学サッカー 2部リーグ前期の報告をし、特に得点、失点 場面についての傾向を発表した。

得点、失点とも、セットプレーからの場面が多く、失点の時間帯が、後半の試合開始直後と試合終了直前に集中していた。

前期の反省から、後期に向けて、後半の開始時の集中力と最後まで走りきる体力の強化が必要であると考えられる。

野口和行

「自然体験活動」実施報告

平成16年度から新しく演習授業として開講 した自然体験活動実習について、受講学生の バックグラウンド、志望動機、授業内容、日 誌から分析した成果等を報告した。

本授業は、さまざまな自然体験活動にボラ

ンティアに参加したいと考えている大学生を 対象に、自然体験活動に関わるさまざまな知 識・技術、対人関係トレーニング等を学び、 夏休みに行われるキャンプにボランティアと して参加し、OJT (on the job training) を行 うことを目的としている。

履修者は、平成16年度が11名(男性1名、 女性10名)、平成17年度が4名(男性2名、 女性2名)であった。授業の最初に1名あた り15分程度のインタビューを行い、志望動機 等の聞き取り調査をした。

自然体験活動の経験は、「2泊3日の宿泊 学習(文1女性)」、「海外研修で1週間のキャ ンプ(文1女性)」など、個人差はあるが、 自然体験活動の経験はそれほど豊富ではな かった。また、ボランティア経験は、「老人 ホームへ訪問(文1女性)」、「障害を持つ子 どものバスケットボールチームのコーチ(経 1男性)」など、1名を除いて何らかのボラ ンティア活動に関わった経験があった。志望 動機は、「教職につくために必要だと思った (理工1男性)」、「将来子どもに関わる職業に つきたいから(文1女性)」等、将来の職業 に関わる動機の他、「人助けというより自分 助け(文1女性)」、「いろいろな場所に行っ て視野を広げたい(文1女性)」など、自己 形成に関わる動機もあった。

1つの事例として、UJ(文1女性)の例を紹介した。彼女は最初別のキャンプに参加する予定であったが、担当団体の責任者と連絡が取れず、団体側からキャンプの参加を断られてしまうという失敗があった。そのため、キャンプ前にかなりの不安を抱えての参加であった。初めての体験、子どもたちとの関わりの中で、コミュニケーションに関わる課題が浮かび上がったが、日を経るにつれ、彼女なりの課題の解決法を発見し、自分自身の成長を感じることができた。

2年間の実践の中で、学生がボランティア をする中で得るさまざまな体験が、自己形成 や自己成長への気づきを獲得する可能性が示唆 された。今後は、ボランティア活動を通した自 己の発現過程について、さらにインタビュー 調査や質問紙調査等で検討していきたい。

第7回 11月29日 安藤 勝英

柔道から JUDO、その審判法の推移

明治15年講道館柔道が創設された。その後 正式に講道館柔道乱捕試合審判規定として明 治33年(1900年)に制定され、幾多の試行錯 誤の中、変遷を経て現行の審判法になった。

現在、日本には講道館柔道試合審判規定と 国際柔道連盟試合審判規定の2つがあり、大 会によってどちらかの規定が適用されている。

規定が制定され1世紀を経たのであるが、 以下の3期に分け、この規定の変遷を考察した。

- ・第1期「規定前史」:明治33年規定の制定から第二次世界大戦が始まる前までの規定のルーツ、核になったものを述べる。
- ・第2期「国際化への黎明期」:終戦後から 国内外の経済発展に伴うスポーツの発展期 に国際柔道連盟が結成され、本格的に活動 を始めるまで。
- ・第3期「国際化から現在まで」世界選手権、 オリンピック種目への採用、更に、国際柔 道連盟独自の規定が制定され、柔道の競技 化、国際化が益々進展を続け現在に至るま で。

加藤 大仁

「スポーツ振興くじ法」の立法過程

1998年5月12日、第142回国会で成立した「スポーツ振興くじ」法は、翌年、第145回国会の有馬文部大臣による文教行政の基本施策でも示されたように、「スポーツ振興のための安定した財源を確保に資すること」を一義的な目的として法案成立が図られた。

かつては東京オリンピックの前にも、国会

ではスポーツ財源確保の手段として「トトカルチョ」を実施することの是非が論じられているが、サッカーくじに関する議論が国会の場で初めてなされたのは1993年2月21日の衆議院予算委員会においてである。答弁に立った鳩山文相は、既にこの時点で議員立法での法案作成を明言している。また3月6日の衆議院文教委員会では文部省の逸見体育局長が、自民党文教部会・文教制度調査会から検討を指示された答えている。

同年1月中旬には自民党内でトトカルチョ 導入に向けた動きがあるとの新聞報道があ り、同30日には、体協・JOC が与野党各党に スポーツくじ導入の要望書が提出されてい る。Jリーグ開始前からサッカーくじの研究 をしていたことを示唆する森喜朗前首相の発 言や、法案提出前の1994年5月に文部省体育 局の審議官が日本 PTA 協議会と法案に関す る懇談会を開いた等、種々の情報から判断し て、「スポーツ振興くじ」制度法案化の段階 で自民党文教族と文部省が大きな役割を果た したことは間違いない。では何故スポーツ議 員連盟主体の議員立法という形で法案が提出 されたのだろうか。

どのような法案を議員立法という形式にするかは、ある程度暗黙の了解がある。これまで自転車競走法やモーターボート競争法といったギャンブル法案は、全て議員立法という形式を取ってきた。「スポーツ振興くじ」法案審議の過程では、くじの当選確率が宝くじ並みでありギャンブル性は低いということ、制度の目的は形を変えたスポーツへの寄附行為であるから当選払戻率が低く抑えられているといった点が強調され、そもそも同法案はギャンブル法案とはいえないのではないかといった認識も示された。

しかし議院法制局勤務経験者が同法案を ギャンブル法案の一種と分類しているよう に、法案提出者にも同法案がギャンブル法案 という認識があったといえよう。そうでなけ

れば、内閣提出という形で法案提出をしても 良かった筈である。法案提出が1997年まで見 送られたのは、政界再編という激流に左右さ れた同時に、ギャンブル法案を提出するリス ク一特に選挙への影響一が考慮されたとする 向きもある。制度的に考えても、法案は各政 党によって議論され、機関承認を経た上で提 出される。また、法案提出当時の小杉降文部 大臣の発言にも、スポーツ議員連盟内での連 絡がそれ程緊密ではなかったとのニュアンス のものがある。法案提出にあたって政党名が 前面に出ると批判に晒される可能性が高いこ とを見込んで、批判をかわすための一方策と してスポーツ議員連盟が主体となって法案を 纏めたという点が強調されたと考えられなく もない。

第8回 12月20日 綿田 博人

ドラフト制度の変遷について

この制度の目的は、各球団の戦力均衡化を図ると共に契約金の高騰化に歯止めをかけることにあった。1965年に実施されて以来、数回の改革があった。その変遷の歴史を顧みた。ドラフト誕生・重複選手抽選期(1965~66)各球団は指名希望選手30名以内の名簿を事前に事務局に提出し、他球団と競合した場合は抽選

予備抽選期(1967~77)

全球団が予備抽選により指名順位を決定。 2巡目以降は指名順位は折り返し。

入札・抽選期(1978~1992)

各順位毎による指名希望選手を提出、重複 があれば抽選

逆指名および重複選手の抽選期 (1993~2000) 社会人と大学選手の1位、2位に限り逆指 名が認められた

自由獲得枠および重複選手抽選期(2001~04) 社会人、大学選手から2名までを事前に獲 得できる。(契約締結内定選手としてドラ フト会議前に公示)

希望入団枠および分離ドラフト期(2005~)

村松 憲

実技授業にビデオフィードバックを用いる (経過報告)

スポーツ技術の獲得には、プレー中の自分 自身の姿を見ることが大いに役立つと考えら れる。本研究は、ビデオカメラで学生のプ レーを撮影し、その直後に映像を見せるとい う方法が、技術獲得に役立つのかどうかを検 討することを目的とする。

テニスの授業時間内に、2台のデジタルビデオカメラと映像処理ソフトを用いて、撮影した映像を一定時間遅らせて再生することにより、録画ボタンや停止ボタン、早送りボタン等を操作することなく、次々に学生に映像を見せた。その際、教員があらかじめ伝えておいた留意点が達成できているかどうかを学生と議論した。

授業終了直前に、アンケートを実施し、学生がビデオを用いる方法を有効と感じている のかどうかについて、調査した。

その結果、12名中11名の学生が、ビデオを 見ながら教員の説明を聞く方法を高く評価し ていた。

今後は、こうした主観的な評価だけでなく、 バイオメカニクス的手法を用いた客観的な評価も取り入れて、ビデオフィードバックの効果を検討し、更に、ビデオフィードバックを 用いた授業を効果的に運営する方法について 検討する必要があると考えられる。

第9回 1月31日

近藤 明彦

学術フロンティア 一身体知研究の動向一

平成17年度より3年間の継続が決定した文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業「超表象デジタル研究」―表象文化に関する融合研究に基づくリベラル・アーツ教育のモ

デル構築―における身体知研究グループの動 向について概説した。

【プロジェクトの目的】

身体知教育・研究の対象は、身体そのもの ではなく身体による行動(Behavior)と考え る。そこにおける身体は、「自己」に立脚す るものであり、身体知はモチベーションとし ては自発的、方法論としては体験的でなけれ ばならない。そして教育においてはモデルが、 研究においてはアーカイブが欠かせない。こ れは、教育はまず対象にモデルを示すこと、 研究は対象となるデータを収集することから 始まるのが自明のことと考えるからである。 公的援助を受けるプロジェクトにおいては、 成果の公開と共有が本来的に課された責務で あることは言うまでもない。また、この共有 の在り方そのものが研究成果となる。した がって、本プロジェクトの目的は以下の三点 にある。

- 1. 教養教育としての身体知教育モデルケースの構築
- 2. 教養研究としての身体知教育実践の蓄積
- 3. 研究成果としての身体知教育の公開・共有 【期待される成果】

身体知教育・研究は、1. 従来の教育効果の刷新と、2. 個別・具体的な問題と理論との融合―教育・研究の臨床性への回帰―を、その問題意識の出発点としていると考えられる。この問題意識の根底には、個・集団のひきこもり化(自己満足的表現の横行)、知の膠着化(広がってゆかない知)、生の弱体化(他者・異環境への対応の危うさ)への危機感がある。このプロジェクトによって、自ら置かれた「大学」という場の境界を再検討すること、他者への公開と共有を通して新たな身体知教育についての可能性が得られることが期待される。さらに、共有・公開によって、自発的動機付けを促し、新たに自主企画の実現をサポートする次のような効果が期待できる。

1.「大学の境界」についての示唆が得られ

ること。

- 2. 身体知教育の蓄積と公開についての示唆が得られること。
- 3. 教育における身体知の可能性についての 示唆が得られること。
- 4. 自発的動機付けを促し、自主企画の実現が促進できること。

高嶺 隆二

東京都立高校水泳授業中死亡事故について

水泳授業で逆飛込みスタートをした生徒が プールの底に頭部を打ちつけ、搬送された病 院で死亡した事件で、生徒の遺族がプールの 設置ならびに管理の瑕疵と指導教諭の指導上 に誤りがあったとして、東京都に対して損害 賠償の請求を行った裁判で、裁判所が原告の 請求を認めて東京都に賠償金の支払いを命じ た事件について、特に国家賠償法第1条なら びに2条についての裁判所の判断と指導教諭 のスタートの指導法の誤りについて考察し、 報告した。

【事件】東京地裁 八王子支部 平成15年7月30日判決(確定) 平成13年(ワ)第2505号 損害賠償請求事件

松田 雅之

大学スポーツにおけるドーピング事情

世界アンチ・ドーピング機関(WADA)発足後、ドーピングに対する規制は世界中に広まっており、アテネオリンピックでは、過去20年以上も検出方法が無かった禁止薬物、ヒト成長ホルモン(HGH)の検査が実施された。トリノオリンピックでは種目によっては尿だけではなく血液検査も実施される。日本でもドーピング対策は、各スポーツ団体において独自に実施されてきてはいるが、その対策が高校、大学レベルにおいてあらゆる競技に浸透しているとは言いがたい。日本陸上競技連盟や、日本水泳連盟が魁として、アンチ・ドーピングに乗り出してから、全日本レベルの大

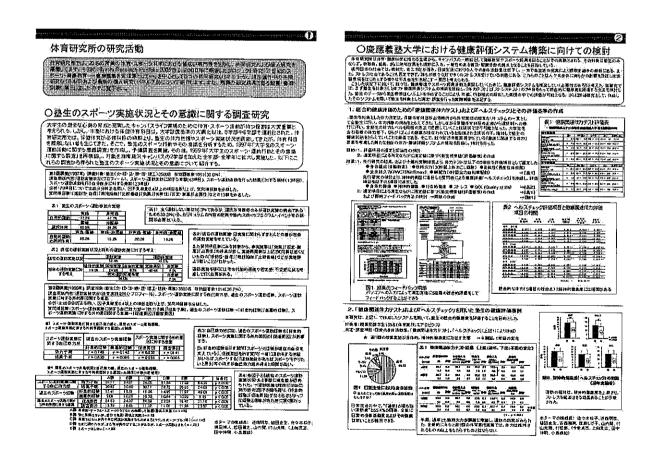
会ではドーピング検査が各競技団体で実施されてはいるが、高等学校、大学においては、インターハイやインターカレッジなどの数試合で実施されているのが実情である。私自身、関東学生陸上競技連盟のドーピング対策委員として、4年前から実施されてきているが、各大学の選手、コーチのアンチ・ドーピングの対応マニュアルを配布したり、アンケートを実施したりしているが、それが選手全員に行き届いているかは疑問である。風邪をひいた選手がエフェドリンの入った薬を避け、漢方薬を飲んでドーピング検査で陽性がでたこともあった。

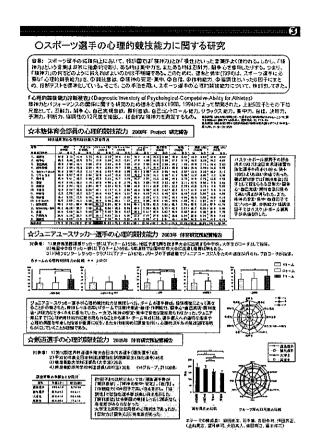
アンチ・ドーピングを日本スポーツ界に浸透させるためには、中学、高校、大学と学校教育の中での指導が急務であると感じる。

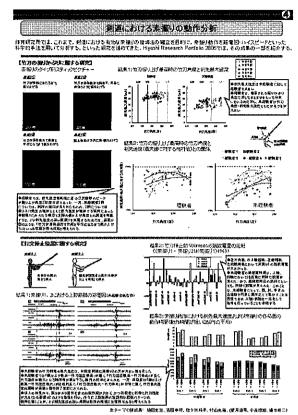
3. Hiyoshi Research Portfolio 2005 参加 報告

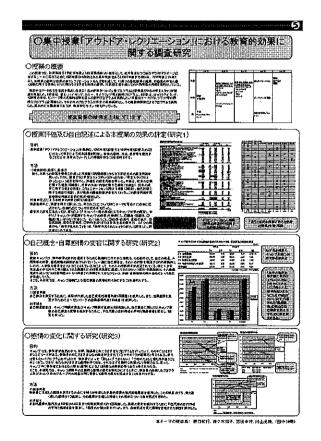
Hiyoshi Research Portfolio 2005 (日吉研究支援センター主催)は、12月20、21日の両日、日吉キャンパスにおける研究活動の広報を目的として、また研究のさらなる活性化を目指して今年初めて開催された。開催当日は、来往舎のギャラリースペース、大会議室・中会議室で、ポスター、映像、音楽などを使い展示発表が行われた。体育研究所では所員の体育・スポーツ科学における幅広い専門性を生かした研究および慶應義塾大学の体育科目を担当する体育研究所の活動を紹介した。各ポスターでは2000年に報告したプロジェクト研究「21世紀のスポーツ・健康教育 一慶應義

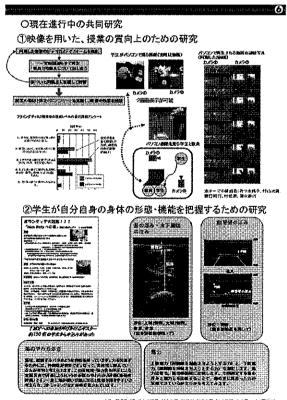
塾を発信源として一」を中心として5つの共 同研究(塾生のスポーツ実施状況とその意識 に関する調査研究、慶應義塾大学における健 康評価システム構築に向けての検討、スポー ツ選手の心理的競技能力に関する研究、剣道 における素振りの動作分析、集中授業「アウ トドア・レクリエーション」における教育的 効果に関する調査研究)、現在進行中の共同 研究(映像を用いた授業の質向上のための研 究、学生が自分自身の身体の形態・機能を把 握するための研究)および最近の個人研究の 概要紹介を行った。今回の Hiyoshi Research Portfolio はキャンパス内外に体育研究所の 活動をアピールするよい機会になったのと同 時に、所員にとってもこれまでの研究所の活 動をまとめるよい機会になった。

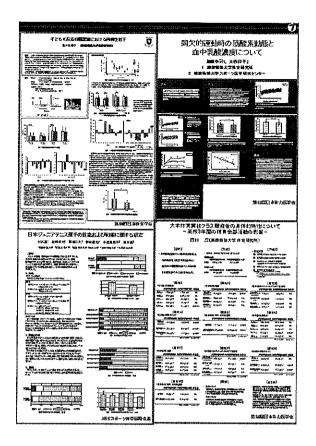


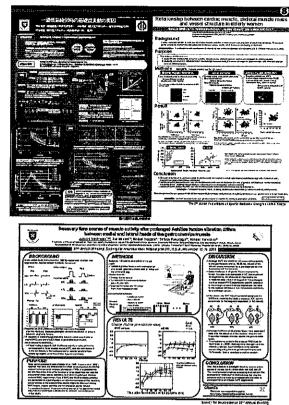












4. 大学体育連合中央研修会参加報告

1) 夏季中央研修会

参加者:綿田博人 山内 賢

期間:平成17年8月24日(水)~26日(金) 会場:サンパレア瀬戸、南山大学瀬戸キャン

パス、品野台カントリークラブ

内容:

第一日目

1. 講演「大学改革の現状と今後」

文部科学省 高等教育局 企画官 小山竜司

『1987年に発足した大学審議会の中で、 18歳人口からみた大学高等教育の諸問題 は、急増期と急減期の計画を経て、高等教 育の将来計画の内、推計上において、2007 年に大学・短大の収容が100%になること を予測している。受験生が大学の名を選ば なければ、理論上はマスコミが命名した「大 学全入の時代 | がやってくるという。とは いっても、受験生は大学を選択する意思を 持っているために、受験志望と入学の偏り は、「大学経営の破綻」のシナリオを余儀 なくされるであろう。現にその現実は新聞 紙面によって具体例がでてしまった。』こ こで重要視されることは、これからの大学 経営や運営は、ただ、大学の特色を打ち出 すだけではなぐ、グランドデザインを表明 していくことが最重要課題となる。高等教 育に対する財政の現状を考えても、日本は 諸外国に比べて教育費への公財政支出の対 GDP 比は1/2の水準である(2001年)。ま た、民間からの大学等への資金の推移も国 内:海外では1:2.5(2003年)であり、資 金の海外研究機関への研究費流出傾向が強 い。対策としては、私学助成や運営費交付 金の充実・確保、国公私を通じた競争的・ 重点的支援(21世紀COE、GP)の充実、 機関補助と個人補助の適切なバランス、基

盤的経費補助と競争的資源配分の有効な組 み合わせ (デュアル・サポート)、民間資 金の国内大学への投資拡大があげられる。 財政とともに、グランドデザインとしての わが国の高等教育の将来像の早急に取り組 むべき重点政策は①人材養成に関する社会 のニーズへの対応②経営の改善③入学者選 抜と教育課程の改善および出口管理の強化 ④留学生交流の促進と充実⑤学位授与機関 たる大学にふさわしい教員組織の形成、研 究者教員の配置、船員教員の教育・研究や 管理運営上の責任の明確化、教養教育の実 施方針の明示⑥教養教育や専門教育等の総 合的な充実の大学院教育の実質化⑧世界 トップクラスの大学院の形成⑨助教授・助 手の位置付けを含めた教員組織の活性化 ⑩高等教育への公財政支出の拡充と民間資 金の積極的導入⑪国公私立を通じた競争的 な資源配分の充実と奨学金による『個人に 対する支援を推進⑫特に大学院レベルでの 国際的に有為な人材の育成に留意するよう に学生支援の充実・体系化を推進等の12提 言が存在する。

その他として、経営困難な学校法人への対応策として、破綻したケースにおける学生の転学支援プログラムを考えているとの報告があった。

2. 基調講演「高等教育における大学体育の役割」

桃山学院大学 学長 松浦道夫 戦後、新制12大学がこの日本に誕生して 60年を間近にむかえ、いまや700あまり存 在する。1991年に大学設置基準の「教育課 程編成の大綱化・自由化」がおこなわれ、 画一化標準化していた高等教育に大きな変 化を求める動きがおこった。経済の流れと しては、日本はバブル期がはじけ、経済の 低迷期・混乱期に突入した。日本における 教育の活性化を狙ったはずが、ここでの大 きな問題して、あまりにも専門教育や職業 教育にその焦点がおかれたために、教養教 育への関心が薄れてしまったことがは見逃 せない。2005年1月に中央教育審議会大学 分科会での答申に中に、カリキュラム編成 上の反省点として、後退した教養教育の再 構築の必要性が指摘されている。このよう な状況の中で、体育の果たすべき役割は大 きい。

- (ア) カリキュラム上の一定の責任
- (イ) 課外活動における責任
- (ウ) 地域連携・地域貢献での学生を含め た活動
- (エ) 国際交流における活動と役割
- (オ) ボランティア活動での役割

その他、現在の若者気質・特徴として見受けられる「諸外国に比べ消極的で自己中心的で社会性の乏しい若者」の所見を解決するために、スポーツ活動における仲間づくり、協調性、積極性を大学の中で養うこと。心の距離を測れる新のコミュニケーション能力を日本の大学生に啓発できる教科は体育の他ならないことを強調する。体育教育と体育に関る教員がカリキュラムの内外で活躍し、必要とされていることを意識すべきである。

3. シンポジウム

「変貌する環境下における大学体育教育の 諸問題」

「変貌する大学環境の現状と問題点」 「国立大学法人における大学体育教育」 「認証評価制度と大学体育の FD」

・少子化の中で、マスコミで取り上げる 「大学全入の時代」と騒がれるが、今後 の学生公募のマーケティングの目標とし ては、「大学を志願しない子、大学にい かない子」を如何に大学に進学する方向 にもっていくかといった市場の掘り起し が重要となる。

- ・大学の体育施設をよくすることは、大学 の活性化につながるはずである。
- ・全学教育に健康・スポーツ教育を活用する。
- ・大きな経費を要する授業を計画して、 テーマに応じたプロジェクトを文科省に 申請する。人的材料は非常勤を活用す る。これには、専任教員は非常勤と異な るという自覚と立場を明確にすることが 条件である。
- ・初等教育としての体育を展開し、FDを 活用して「あなたは今何をしていますか」 の自問自答のパターンを常識化する。

第二•三日目

種目に分かれて実技指導研修会が行われた。種目は、第二日目が「テニス、バドミントン、卓球、フィットネス&トレーニング、ゴルフ」弟三日目が「ナンバビクス、ニューコンセプトスポーツ(クロリティー、ビーンボウリング、フリーブロー)、スクエアステッピングエクササイズ」であった。

2) 冬季中央研修会

参加者:山内 賢

期間:平成18年1月24日(火)〜26日(金) 場所:北海道ニセコグランヒラフスキー場 内容:

1. 第一日目午後、第二日目午後、第三日目午前は、技術レベルに分かれて実技指導研修会が行われた。内容は技術向上のための講習、オプションで SAJ スノーボード検定が用意されているので、受験のためのトレーニング、指導法についての3点であった。私は中級レベルの参加のなかで、深雪でのターン、不整地中・急斜面でのロング・ショートターン、整地中・緩斜面カービングターンを主とした技術向上プログラムを経験した。午前・午後とも3時間単位の休

憩なしのハードなプログラムの中、強い滑りを修得したことを感想に持った。

- 2. 第二日目午前は検定会であった。私は1 級検定を受験した。試験種目は「中斜面・ショートターンカービング・100m」、「中 斜面・ロングターンカービング・100m・ 4~6ターン」、「中急斜面・フリーライディ ング・150m」であった。緊張感の中、結 果は合格であった。
- 3. スキーとの検定における相違点は、運動の力学的構造が「落下運動に適度な制動を与えることによりターンが構成される。」といった点で同じであるが、斜面に対して左右非対称な身体運動の中で、滑走ターン弧を左右均等にコントロールするとこポーツは、スピードとターン弧のコントロールが安全につながる。スノースポーツのファンとして、この講習と検定で確認した技術を教員として、時にはスポーツ愛好者として、教育の現場やゲレンデ内での自然の中で、できるだけ多くの人に伝えていきたいと思う。
- 4.情報交換会が毎夕刻行われた。ここでは 講習のインストラクターから学ぶさまざま な指導方法のノウハウは今後の参考にした いと考える。一番印象に残ったことは、、安 定した滑走をするテクニックのではなく、 が、「板の滑走にあわせて乗るのではなと。」 がに板を操作するように心がけること。」 の表現、すなわち、「滑走局面のどの局面 でも、その場ジャンプができる位置に身体 があることを意識しつづけこと。」であっ た。また、最終泊の夜には、「スノーボー ドカービングターンの定量・定性分析」の 演題で、スノーボードにロードセルをつけ ておこなった板の力学的構造や下肢の筋電

の様相についての研究発表が行われた。内容は興味あるものであり、最終日の滑走においての「ターンの構成」、「身体の運動方法」「板の性能を感じるヒント」等の着眼点に大きなヒントをもらえた。利己的な感覚的な表現であるが、重力や雪面抵抗をうまく使って滑るためには、前足が方向付け、後ろ足が荷重の操作として、斜面に対して意識的に運動を伝えることが重要であることがわかった。

5. 今後もし、体育の実技種目において、スキーとともにスノーボードが取り入れられたならば、今回の研修の成果を教育の現場で生かしたいと考える。

Ⅲ. 教育活動記録



Ⅲ-1. 授業の実施

1. 平成17年度体育科目の履修者統計

1) 体育学講義と体育学演習

平成17年度は、16年度に体育理論・保健衛生を統合した体育学講義、理論と実習を合わせた形式の体育学演習の新設という変更をしてから、2年目の実施にあたる。体育学演習では新たに「アスレチックトレーニング演習」

を開設した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1 に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2 に示す。履修者数の合計は体育学講義で286名(前年比1.21倍)、体育学演習で70名(前年比1.25倍)となり双方で22%の増員となった。

表Ⅲ-1-1. 平成17年度 体育学講義のテーマ及び担当者

- 講義名	;	コマ数	ķ	HI V # F	E 64 + 146
——————————————————————————————————————	春	秋	計	担当教員	履修者数
スポーツの効用を科学的にみる(スポーツ総論)	1		1	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将・近藤明彦	17
スポーツ心理学の世界	1		1	近藤明彦	58
スポーツの技と文化を探る	1		1	植田史生・綿田博人・石手 靖・須田芳正	28
スポーツと身体(からだ)の基礎理論	1		1	吉田泰将	105
アウトドアを考える		1	1	村山光義・野口和行	8
アスリートのためのスポーツ科学		1	1	近藤明彦・佐々木玲子	28
健康と運動の科学		1	1	近藤明彦・齊藤郁夫・辻岡三南子・和井内由 充子・森 正明	25
政治社会とスポーツ/スポーツ事故と法		1	1	高嶺隆二・加藤大仁	17

表Ⅲ-1-2. 平成17年度 体育学演習のテーマ及び担当者

講 義 名	;	コマ数	ጷ	17 W # E	First Advantage Mills
牌 投 乜	春	秋	計	担当教員	履修者数
自然体験活動演習	1		1	野口和行	5
アスレチックトレーニング演習	1		1	山内 賢・西村 忍	12
ライフセービング (救急法の基礎)		1	1	山内 賢・西村 忍	25
スポーツメンタルトレーニング		1	1	近藤明彦	26
からだの動きをはかる(バイオメカニクス)		1	1	佐々木玲子・村山光義・村松 憲	2

2) 体育実技A・B

体育実技も平成16年度より評価方法の違いによる体育実技A・体育実技Bという新分類となって2年目の実施であった。表Ⅲ-1-3に体育実技A・B(ウィークリースポーツ)の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4に体育実技A・B(ウィークリースポーツ)の各種目の履修者数、表Ⅲ-1-5に体育実技A・B(シーズンスポーツ)の各種目の担当者及び履修者数を示す。ウィークリースポーツでは、前年までシーズンスポーツで開講していた軟式野球を移設するなど、日吉・三田合計で17

コマ、定員で約230名分を増設した。また、 三田開講種目に限り、春学期第1週目に履修 許可証を発行する先着制の履修登録を新たに 実施した。この結果、4月1回目の登録者数 は500名余り増加して8015名となり、特に三 田開講種目では倍率0.99、充足率が78%と大 幅な増員となった。しかしながら、最終的な 総履修者数は7078名(前年6985名:1.3%増) と漸増したにとどまった。この理由は、申込 者が増加しても抽選で履修不可となってしま う者が依然、日吉開講種目を中心に多いため であり、今後に課題を残している。

表Ⅲ-1-3. 平成17年度 体育実技A・B (ウィークリースポーツクラス) 担当者及び担当種目

	担当者	種目
教 授	高嶺隆二	水泳
		
	近藤明彦	ウォーキングエクササイズ、体力 UP コース
"	安藤勝英	柔道
"	佐々木玲子	エアロビクス
"	植田史生	
11	綿田 博人	野球、ゴルフ
助教授		
	松田雅之	
<u>"</u>		バレーボール (B)
"	村山光義	******
<i>"</i>	山内賢	ハンドボール、バスケットボール、体力 UP コース
"	吉田 泰将	
//	加藤大仁	バスケットボール
専任講師	野口和行	
<i>"</i>	須田 芳正	サッカー、フットサル
# //	村松憲	テニス
専任講師(有期)		バドミントン
//		エアロビクス
助 手(嘱託)	西村 忍	
// -/- >44 +4 =44 AT	牛山 潤一	体力 UP コース
非常勤講師	李字等	サッカー
//	上向 貫志	サッカー
//	遠藤 千草	ソフトボール
	大嶽 真人	フットサル
"	大津 信行	レスリング
"	小笠原清忠	
"	勝又 正浩	ゴルフ
"	加藤大雄	テニス
"	川西 大介	アーチェリー
"	菊池 秀悦木塚 孝幸	トランポリン
		バスケットボール
"		
"	小森康加	
//	島田桂太郎	
"	鈴木秀五郎 竹村りょうこ	
"		フェンシング
"	手島智佳子	
"	藤平 信一	合氣道
" "	額田 信相	
"	濱名 邦雄	ソフトテニス
",		バドミントン
"	堀場 雅彦	テニス
"	松本健太郎	テニス
"	松山保幸	
"//	望月康司	
"	安松 幹展	サッカー
"	山田美絵子	バレーボール
"	吉田武	卓球
	依田 珠江	
11	1以田	バスケットボール

表Ⅲ-1-4. 平成17年度 体育実技 A・B (ウィークリースポーツクラス) 種目別履修状況

Lib CT	TN D A		コマ数	ξ	-		644-	最 終	
地区	科目名	春学期	秋学期	計	定員	登録数	倍率	履修者数	充足率
	アメリカンタッチフットボール	1	1	2	60	15	0. 25	18	30%
	アーチェリー	1	1	2	40	68	1. 70	40	100%
	ウォーキングエクササイズ	2	2	4	120	56	0.47	87	73%
	エアロビクス	9	9	18	450	560	1.24	439	98%
i	ゴルフ	6	6	12	240	363	1.51	235	98%
	サッカー	13	13	26	992	656	0, 66	746	75%
	ジョギング	1	1	2	60	43	0.72	48	80%
	ソフトテニス	1	1	2	40	17	0.43	23	58%
	ソフトボール	5	5	10	288	331	1. 15	265	92%
	ダンス	3	3	6	120	117	0.98	111	93%
日	テニス	16	16	32	640	1019	1.59	631	99%
	トランポリン	1	1	2	40	40	1.00	40	100%
	ニュースポーツ(A・B)	2	2	4	120	54	0.45	91	76%
吉	バスケットボール	15	15	30	768	776	1.01	638	83%
	バドミントン	9	9	18	520	660	1. 27	472	91%
地	バレーボール(A)	7	7	14	560	456	0.81	515	92%
, ,	バレーボール (B)	6	6	12	440	171	0.39	258	 59%
	ハンドボール	2	2	4	160	63	0.39	79	49%
区	フェンシング	1	1	2	40	19	0.48	22	55%
	フットサル	3	3	6	150	302	2.01	152	101%
開	フライングディスク(A・B)	3	3	6	180	76	0.42	164	91%
(71)	ボクシング	1	1	2	60	49	0.82	58	97%
	レスリング	1	0	1	20	6	0.30	6	30%
設	剣道	8	8	16	320	- 66	0. 21	99	31%
-	合氣道	1	1	2	60	83	1.38	60	100%
	自動車	1	1	2	40	73	1. 83	40	100%
	柔道	3	3	6	180	74	0.41	81	45%
	水泳	8	2	10	255	70	0. 27	78	31%
Ţ	体力 UP コース	10	10	20	400	378	0. 95	388	97%
	卓球	7	7	14	420	423	1.01	423	101%
	野球	2	2	4	120	99	0.83	109	91%
Ī	軟式野球	1	1	2	60	71	1.18	60	100%
Ì	陸上競技	1	1	2	60	13	0. 22	19	32%
ſ	日 吉 合 計	151	144	295	8023	7267	0. 91	6495	81%
	<u>ディス</u> ダンス	2	2	4	80	119	1.49	85	106%
-	テニス	5	5	10	132	179	1. 36	128	97%
_	バレーボール	2	2	4	100	78	0. 78	77	77%
畫「	フットサル	2	2	4	100	123	1.23	91	91%
三田地区開設	弓術	2	2	4	80	103	1.29	79	99%
崩上	剣道	2	2	4	80	22	0. 28	23	29%
設	合氣道	1	1	2	60	82	1.37	58	97%
-		2	2	4	120	42	0.35	42	35%
	三 田 合 計	18	18	36	752	748	0.99	583	78%
	全体合計	169	162	331	8775	8015	0. 91	7078	81%
	FIT H FI	100	104	001	0110	0010	0.91	1010	Q1 70

表Ⅲ-1-5. 平成17年度 体育実技A・B (シーズンスポーツクラス) 担当者及び履修状況

	月	科 目 名	担当者	定員	登録数	倍率	最 終 履修者数	充足率
		空手	蓮池敬一郎	40	23	0. 58	38	95%
春		弓術	上山 幸一	40	69	1.73	40	100%
	7	水泳	峰岸 克行	50	22	0.44	28	56%
	8 月	馬術(B)	細田 壮一	36	41	1.14	34	94%
期		山岳 (B)	丸誠一郎	50	10	0.20	12	24%
		ヨット (B)	井上 進	40	37	0. 93	37	93%
		アウトドアレクリエーション(B)	野口 和行	50	43	0.86	49	98%
秋	9	器械体操	首藤 聡史	30	19	0.63	27	90%
学	月	端艇	月村 繁雄	20	4	0.20	7	35%
		バレーボール (B)	石手 靖	30	8	0.27	20	67%
期	2	スキー (B)	吉田 久男	150	24	0. 16	36	24%
	月	スケート (B)	小山 正	40	36	0.90	40	100%
		計		576	336	0. 58	368	64%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、より適切な授業展開のための基礎資料を得ることを目的に、体育実技を履修した学生による授業評価を実施している。アンケートの実施は授業最終週およびその1週前の授業終了前15分間程度を当てて実施している。また、アンケートの回収方法は教員が指示をし、学生が配布・回収を行い、教員が現場を離れることで、学生がより率直な評価をしやすい配慮をしている。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	2651
秋学期ウィークリー	2208
秋学期講義・演習	86
シーズン	290

平成17年度体育科目(講義・演習・実技)履修者アンケート

慶応義塾大学体育研究所

このアンケートは、	FD [Faculty	${\bf Development}:$	大学教員の資質開発	(授業内容、	方法の改善・向
上)」をめざして行	iわれるものです。	。皆さんの意見	を次年度以降の授業は	こ反映させる	とともに、今後
の塾内のスポーツ振	(興に対して役立)	てる目的以外に	は用いませんので率	直な意見をお	聞かせください。

・科目名を記入してください	···
・担当教員名を記入してください	
・曜日時限に〇印 (月・火・水・木・金・土)	曜、(1・2・3・4・5)限
・実施地区に〇印 日吉 ・ 三田	
● 受講した授業についての以下の質問に関して、5 — 4 — 3 — 3 —	
強くそう思う そう思う どちらとも言えない	
の5つの中から一番当てはまる番号に○印を付けてく	
履修者全員(講義・演習・実技)回答 1. 教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明し	
・・ 教員の投票の日的のよび日標をわかりやすく説明し ・ 教員の指導・教授方法は適切であった	
2. 教員の指導・教授力法は週別であった 3. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた	5 - 4 - 3 - 2 - 1
4. 教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した	
5. 教員の話し方は聞き取りやすかった	5 - 4 - 3 - 2 - 1 $5 - 4 - 3 - 2 - 1$
6. この授業は塾生にとってふさわしいものだった	5 - 4 - 3 - 2 - 1 5 - 4 - 3 - 2 - 1
7. この授業は自分にとって満足出来るものであった	5 - 4 - 3 - 2 - 1 5 - 4 - 3 - 2 - 1
8. この授業によって知識を深めることができた	5-4-3-2-1 5-4-3-2-1
9. この授業の内容は興味のあるものだった	5-4-3-2-1 5-4-3-2-1
10. このクラスの雰囲気は良好であった	5 - 4 - 3 - 2 - 1 5 - 4 - 3 - 2 - 1
11. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ	5-4-3-2-1 5-4-3-2-1
実技履修者のみ回答	
12. この授業は健康や体力の向上に役立った	5 — 4 — 3 — 2 — 1
13. この授業によって運動技術が向上した	5 - 4 - 3 - 2 - 1
14. 運動量は適切であった	5 - 4 - 3 - 2 - 1
構義・演習履修者のみ回答	
15.この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切	であった
	5 — 4 — 3 — 2 — 1

裏面へ続きます

●自由記述1	
授業内容について	
よかったこと:	
改善を要すること:	
●自由記述2	
教員について	
よかったこと:	
•	
改善を要すること:	
●自由記述 3	
施設および機器・用具等について	
よかったこと:	
改善を要すること:	
●自由記述 4 ·	
体育科目全般に関する意見および提案	
., , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	

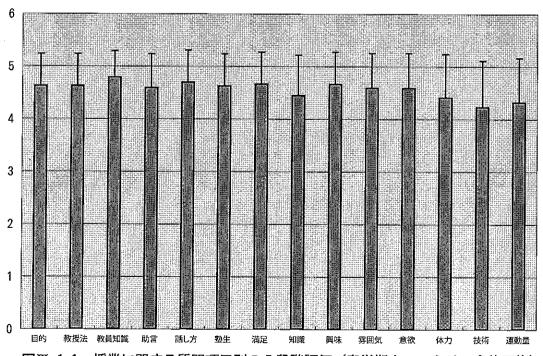
アンケートの回答数及びアンケートの質問項目を表Ⅲ-1-6、表Ⅲ-1-7に示す。アンケートの各質問項目には、「強くそう思う」(5点)から「まったくそう思わない」(1点)までの5段階で回答させ、得点化して評価した。その結果を実技の春学期ウィークリー全体(図Ⅲ-1-1)、秋学期ウィークリー全体(図Ⅲ-1-2)、実技のシーズンスポーツ全体(図Ⅲ-1-4)、秋学期全体(図Ⅲ-1-5)、に区分して示した。また、実技種目は種目毎の集計も一覧表で示した(表Ⅲ-1-8、9、10)。

1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

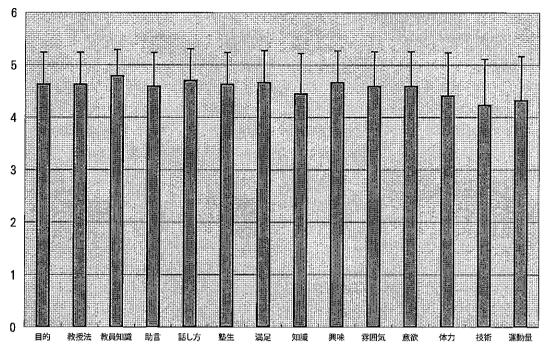
春学期および秋学期ウィークリー実技における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-1、2に示す。学期間には差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。

例年と同じように全般に 4 点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」であった。また、目的の説明や話し方、教授法の適切さ

等の教員に対する評価項目が概ね高得点で あった。一方、最も平均点が低いものは、「こ の授業によって運動技術が向上した」であり、 「この授業によって知識を深めることができ た」「運動量は適切であった」といった項目 も全体の中では比較的低い評価であった。種 目の特性によって、一概に比較できない点も あるので、種目別の集計を参照する(表Ⅲ-1-8、9)。「技術の向上」では、ジョギング、 軟式野球、フライングディスク、「運動量」 では軟式野球、自動車、アーチェリーなどの 種目で3点台の低めの評価となった種目が あった。しかし、「知識を深める」の項目は、 全体に 4 点台の前半の評価であった。ジョギ ングのような種目では授業でねらいとされる 点や学生の求める点が技術の獲得にない場合 もある。また、単なる「知識」の伝達より身 体を通じた実践による教育が展開されるのは 実技教科の特性と考えるべきであろう。しか し、運動量が不適切であったと評価される場 合は、種目特性以外に、人数や場所の確保が 適切であるのか等の検証を進める必要がある と思われる。



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価(春学期ウィークリー全体平均)



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価(秋学期ウィークリー全体平均)

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧(春学期ウィークリー)

経口力	t viel.		1	+orated value	1 **. == !		7 77		1 200		T" ·	1				
種目名	人数		目的	教授法			話し方	-	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
バレーボール	314	平均	4.5	4.5	4.7	4.6	4.6	4.6	4.7	4.2	4.6	4.7	4.6	4.4	4.2	4.4
	-	標準偏差平均	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.9	0.6	0.6	0.6	0.8	0.9	0.8
バスケットボール	269	標準偏差	4.7	0.6	4.8 0.5	0.6	4.7 0.6	4.7	4.8	4.3	4.8	4.7	4.7	4.8	4.4	4.5
		平均	4.7	4.7	4.9	4.5	4.7	0.5	0.5 4.6	0.9	0.6	0.5	0.6	0.6	0.8	0.8
テニス	262	標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.7	0.5	0.6	0.7	0.6	4.7 0.5	4.5 0.7	4.6 0.7	0.7	0.7	4.3
		平均	4.7	4.6	4.8	4.6	4.6	4.6	4.5	4.3	4.7	4.6	4.6	4.5	4.2	0.8
サッカー	205	標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.6	0.7	0.7	0.8	0.9	0.6	0.6	0.6	0.8	0.9	0.8
. * 1 * 7 > . 1 > .	1.00	平均	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.7	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.4	4.6
バドミントン	198	標準偏差	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.8	0.7
エアロビクス	101	平均	4.7	4.8	4.7	4.6	4.8	4.8	4.8	4.4	4.8	4.7	4.7	4.7	4.2	4.6
エンロビシン	191	標準偏差	0.6	0.4	0.5	0.6	0.5	0.5	0.4	0.7	0.5	0.5	0.6	0.6	0.8	0.6
卓球	175	平均	4.6	4.6	4.6	4.5	4.6	4.4	4.5	4.2	4.5	4.6	4.5	4.2	4.1	4.2
+**	175	標準偏差	0.5	0.6	0.7	0.6	0.6	0.8	0.7	0.9	0.7	0.6	0.7	0.9	0. 9	0.9
体力 UP コース	144	平均	4.8	4.7	4.8	4.5	4.7	4.5	4.5	4.4	4.5	4.2	4.4	4.5	3.8	4.1
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.6	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	0.6	0.8	0.8
ソフトボール	103	平均	4.6	4.6	4.9	4.8	4.9	4.7	4.7	4.2	4.7	4.7	4.7	4.3	4.1	4.3
	<u> </u>	標準偏差	0.6	0.6	0.3	0.5	0.3	0.7	0.6	1.0	0.6	0.7	0.6	0.9	1.0	1.0
ゴルフ	77	平均	4.4	4.4	4.7	4.3	4.6	4.5	4.5	4.5	4.6	4.2	4.5	4.1	4.3	4.2
		標準偏差	0.8	0.8	0.7	0.8	0.6	0.7	0.8	0.7	0.7	0.8	0.6	0.8	0.9	0.9
フライングディスク	72	平均 標準偏差	4.8 0.5	4.6	4.8	4.6	4.7	4.3	4.4	4.3	4.4	4.5	4.4	3.8	3.8	4.0
		平均	4.9	0.5 4.9	0.6 5.0	0.6 4.9	0.5 4.8	0.9 4.8	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	1.0	1.0	0.9
水泳	64	標準偏差	0.3	0.3	0.2	0.4	0.4	0.4	4.9	4.8	4.9	4.8	4.7	4.8	4.6	4.4
	-	平均	4.6	4.6	4.8	4.7	4.8	4.7	0. 4 4. 7	0.5 4.3	0.3 4.8	0. 4 4. 6	0.5	0.5 4.7	0.6	0.7
フットサル	86	標準偏差	0.6	0.6	0.4	0,6	0.5	0.6	0.5	0.8	0.4	0.6	4.6 0.7	0.6	4. 4 0. 9	4. 5 0. 7
1.55		平均	4.4	4.3	4.8	4.4	4.5	4.6	4.7	4.4	4.7	4.6	4,7	4.1	4.1	4.3
ダンス	78	標準偏差	0.8	0.9	0.6	0.8	0.8	0.7	0.6	0.8	0.5	0.6	0.6	0.9	0.9	0.9
ハンドボール		平均	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	4.9	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7
ハントルール	41	標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.6	0.4	0.6	0.6	0.7	0.5	0.6	0.7	0, 5	0.6	0.6
剣道	50	平均	4.8	4.9	4.9	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9	4.9	4.8	4.6	4.3	4.3	4.2
X1,000	30	標準偏差	0.4	0.3	0.3	0.5	0.3	0.4	0.4	0.3	0.3	0.4	0.6	0.8	0.8	0.9
野球	19	平均	4.2	4.1	4.6	3.8	4.5	4.5	3.9	3.7	4.3	4.5	4.6	4.3	4.0	4.1
		標準偏差	0.7	0.7	0.7	0.9	0.8	0.8	1.0	1.0	0.7	0.8	0.6	0.5	0.7	1.0
ニュースポーツ	37	平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	4.6	4.8	4.7	4.8	4.9	4.7	3.9	3.9	4.1
		標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	0.6	0.5	0.6	0.4	0.3	0.6	0.9	1.0	0.9
ウォーキングエクササイズ	34	平均	4.5	4.5	4.8	4.4	4.7	4.3	4.4	4.3	4.3	4.6	4.6	4.5	3.9	4.0
		標準偏差	0.7	0.7	0.5	0.7	0.5	0.8	0.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.7	0.8	0.9
柔道	49	平均 標準偏差	4.8 0.5	4. 7 0. 6	4.9	4.8	4.7	4.7	5.5	4.6	4.8	4.8	4.7	4.6	4.6	4.5
·		平均	4.9	4.9	0.3 5.0	0.5 4.9	0.7	0.6	5.8	0.7	0.5	0.4	0.7	0.7	0.7	0.7
合氣道	53	標準偏差	0.2	0.4	0.0	0.4	5.0	4.8 0.5	4.8 0.5	4.8	4.8	4.8	4.7	4.3	4.1	4.3
ald In Investo		平均	4.1	3.9	4.3	4.0	4.0	4.2	4.0	0.5 4.0	0.4	0.4 4.1	0.5 4.4	0.9 3.8	1.0	0.8 3.2
軟式野球	21	標準偏差	1.2	1.1	1.2	1.2	0.9	1.2	1.2	1.2	1.2	1.1	1.0	1.0	3.5 1.2	1.0
トランゼロン		平均	4.3	4.4	4.5	4.2	4.5	4.8	4.7	4.6	4.9	4.7	4.7	4.4	4.5	4.3
トランポリン	19	標準偏差	0.7	0.8	0.6	0.8	0.8	0.5	0.5	0.6	0.2	0.6	0.5	0.7	0.7	0.8
自動車	10	平均	4.7	4.8	4.8	4.6	4.8	4.6	4.8	4.5	4.7	4.5	4.7	3.4	4.3	3.7
口刹井	18	標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4	0.6	0.4	0.7	0.5	0.8	0.6	1.1	0.8	1.1
ジョギング	17	平均	4.5	4.5	4.8	4.5	4.5	4.5	4. 5	4.2	4.5	4.7	4.6	4.7	4.2	4.3
	11	標準偏差	0.7	0.7	0.4	0.7	0.7	0.8	0.9	1.0	0.8	0.5	0.7	0.6	0.8	1.3
アーチェリー	12	平均	4.8	4.8	5.0	4.8	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	4.3	4.3	3.8	4.2	3.8
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.5	0.3	0.3	0.3	0.5	0.3	0.8	0.8	1.0	0.7	0.8
陸上競技	8	平均	4.9	4.9	5.0	5.0	4.9	4.8	4.8	4.4	4.5	4.8	4.8	4.5	4.5	4.3
		標準偏差	0.4	0.4	0.0	0.0	0.4	0.5	0.5	1.1	0.5	0.7	0.5	0.8	0.8	0.7
アメリカンタッチフットボール	8	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.6	4.8
		標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7	0.7
フェンシング	6	平均標準偏差	4.8	5.0	4.8	4.8	5.0	5.0	5.0	4.7	4.8	5.0	4.8	4.5	4.2	4.2
		平均	0.4 4.7	0.0 4.8	0.4 4.7	0.4	0.0	0.0	0.0	0.5	0.4	0.0	0.4	0.5	0.8	1.2
ソフトテニス	6	標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.4	4.8 0.4	0.4	4.7	4.2	4.8	4.8	4.8	4.3	4.3	4.3
		平均	4.6	4.6	5.0	4.6	4.9	0.4 4.9	0. 5 4. 8	0.8 4.4	0.4 4.9	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5
弓術	29	標準偏差	0.6	0.6	0.2	0.7	0.4	0.4	0.4	0.7	0.4	0.5	4.8	4.1	1.0	4.3
	F	MA - KAREL	V. V	5.5 1	0.2	V- 1	V- 4	V-4	V. 4	V. 1	0.4	0.0	0.5	0.9	0.8	0.9

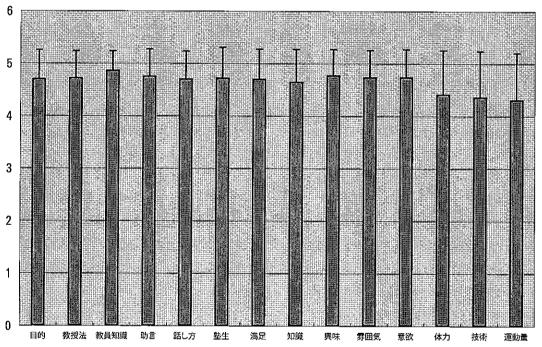
表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧(秋学期ウィークリー)

紙口々	1 **		□ A4-	数十四十	₩ Þ /****				3#± 1**	hr-134h	R#t n-t-	前四ヶ	本小	/sl-=-l	++-40-	福利中
種目名	人数	7715-	目的	教授法		助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
バレーボール	240	平均	4.4	4.4	4.6	4.6	4.6	4.6	4.6	4.2	4.6	4.6	4.6	4.4	4.2	4.3
		標準偏差	0.8	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	0.6	0.9	0.7	0.7	0.6	0.8	0.9	0.8
バスケットボール	238	平均	4.8	4.7	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7	4.4	4.8	4.7	4.7	4.7	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6	0.5	0.6	0.9	0.4	0.5	0.5	0.6	0.9	0.8
テニス	249	平均	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.6	4.6	4.5	4.4	4.3
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.7	0.5	0.6	0.7	0.7	0.5	0.7	0.7	0.7	0.7	0.9
サッカー	174	平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.7	4.4	4.7	4.6	4.6	4.7	4.4	4.5
	1,1	標準偏差	0.6	0.5	0.4	0.6	0.7	0.5	0.6	0.8	0.6	0.6	0.7	0.7	0.8	0.9
バドミントン	198	平均	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.7	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.4	4.6
7.1.72.12	100	標準偏差	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.6	0.7	0.8	0.7
エアロビクス	164	平均	4.7	4.8	4.8	4.6	4.8	4.8	4.8	4.4	4.7	4.7	4.7	4.6	4.1	4.5
11 DC//	104	標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.5	0.8	0.6	0.5	0.6	0.6	0.8	0.6
卓球	153	平均	4.6	4.6	4.6	4.5	4.7	4.6	4.6	4.4	4.6	4.5	4.5	4.0	4.2	4.2
十 孙	100	標準偏差	0.6	0.7	0.7	0.7	0.5	0.6	0.7	0.8	0.6	0.7	0.7	0.9	0.9	0.9
体力 UP コース	114	平均	4.8	4. 7	4.9	4.6	4.8	4.5	4.6	4.5	4.5	4.4	4.4	4.6	4.1	4.2
体力 UF コース	114	標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7	0.6	0.9	0.8
	-00	平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.4	4.8	4.7	4.6	4.3	4.2	4.4
ソフトボール	80	標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.6	0.4	0.6	0.6	0.8	0.5	0.7	0.7	0.9	0.9	0.8
->1 -7		平均	4.4	4.4	4.7	4.2	4.6	4.5	4.6	4.4	4.6	4.0	4.3	3.9	4.1	4.0
ゴルフ	69	標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.9	0.5	0.7	0.8	0.7	0.6	0.8	0.9	1.0	0.9	0.8
ラニ ハルグデ・ラト		平均	4.6	4.6	4.8	4.7	4.7	4.3	4.5	4.4	4.4	4.5	4.4	3.8	3.9	4.2
フライングディスク	46	標準偏差	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.9	0.8	0.8	0.8	0.6	0.9	1.1	0.9	1.0
		平均	4.5	4.6	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.5	4.8	4.6	4.5	4.7	4.5	4.4
フットサル	74	標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5	0.6	0.6	0.5	0.8	1.0
		平均	4.6	4.5	4.9	4.4	4.5	4.8	4.6	4.7	4.7	4.8	4.7	3.8	3.7	4.0
ダンス	77	標準偏差	0.7	0.7	0.4	0. 7	0.8	0.5	0.6	0.6	0.7	0.5	0.4	1.1	1.1	1.0
		平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.7	4.6	4.6	4.6	4.5	4.5	4.7	4.3	4.6
ハンドボール	24	標準偏差	0.5	0. 5	0.4	0.5	0.4	0.6	0.8	0.6	0.8	0.9	0.9	0.6	0.9	0.7
		平均	4.9	4.9	5.0	4.9	5.0	4. 9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.6	4.6	4.5	4.6
剣道	56	標準偏差	0.4	0.3	0.1	0.3	0.2	0.4	0.3	0.4	0.3	0.5	0.9	0.7	0.6	0.7
		平均	4.1	4.4	4.8	4.1	4.7	4.3	4.3	4. 2	4.4	4.7	4.3	4.3	4.0	4.3
野球	12	標準偏差	0.7	0.7	0.4	0.8	0.5	0.8	0.9	0.7	0.9	0.8	0.7	0.5	0.9	0.9
		平均	4.8	4.8	4.9	4. 7	4.9	4.7	4.9	4.5	4.6	4.8	4.8	4.0	4.0	4.1
ニュースポーツ	41	標準偏差	0.5	0.5	0.4	0. 7	0.4	0.7	0.4	0.8	0.8	0.4	0.5	1.0	1.0	0.9
		平均	4.6	4.6	4.8	4.6	4.6	4.4	4.4	4.2	4.3	4.3	4.3	4.5	3.8	4.1
ウォーキングエクササイズ	33	標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.7	0.8	0.6	0.6	0.6	0.5	0.9	0.9
		平均	4.8	4.8	5.0	4.7	4.7	4.7	4.8	4.7	4.8	4.8	4.6	4.7	4.5	4.6
柔道	41	標準偏差	0.5	0.5	0.2	0.6	0.7	0.7	0.4	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7
		平均						4.7	4.8			4.7	4.7		4.1	
合氣道	35		5.0	4.9	5.0	4.9	5.0			4.8	4.9			4.3		4.0
		標準偏差	0.0	0.3	0.0 4.8	0.3	0.2	0.6	0.4	0.4	0.2	0.4	0.5 4.7	0.9 4.2	0.9	0.9
軟式野球	19			4.3		4.3	4.7	4.6	4.5	4.0	4.5	4.6				3.4
		標準偏差	0.8	0.9	0.4	0.9	0.7	0.7	0.6	1.0	0.7	0.5	0.7	0.7	0.8	1.1
トランポリン	16	平均	4.3	4.4	4.6	4.4	4.5	4.6	4.7	4.3	4.7	4.8	4.6	4.3	4.3	3.8
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.7	0.6	0.6	0.5	0.8	0.5	0.4	0.6	0.9	0.8	1.0
自動車	15	平均	4.8	4.8	4.9	4.9	4.7	4.9	4.9	4.9	4.9	4.7	4.8	3.7	4.1	3.6
		標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.3	0.6	0.4	0.8	0.7	0.9
ジョギング	11	平均	4.3	4.3	4.8	4.4	4.8	4.5	4.2	3.6	4.1	4.3	4.1	4.3	3.5	3.7
		標準偏差	0.6	0.8	0.4	0.8	0.4	0.5	0.8	0.7	0.7	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5
アーチェリー	16	平均	4.8	4.7	4.9	4.9	4.5	4.5	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	3.8	3.9	3.9
		標準偏差	0.4	0.5	0.3	0.3	0.7	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	0.9	0.9	0.8
陸上競技	5	平均	4.4	4.6	4.8	4.8	4.8	4.6	4.8	4.4	4.8	4.8	4.8	4.4	4.0	4.4
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.9	1.0	0.5
アメリカンタッチフットボール	3	平均	5.0	5. 0	5.0	5.0	5.0	4.7	5.0	5.0	4.3	5.0	4.3	5.0	5.0	5.0
	-	標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.0	0.6	0.0	1.2	0.0	0.0	0.0
フェンシング	7	平均	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	1.9	4.7	4.7	5.0	5.0	4.9	4.9	5.0	4.4
	•	標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.4	0.5	0.5	0.0	0.0	0.4	0.4	0.0	0.5
ソフトテニス	9	平均	4.4	4.6	5.0	4.7	4.8	4.7	4.8	4.2	4.8	4.4	4.7	4.7	4.4	4.4
· / · / -/	J	標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.7	0.4	0.5	0.4	0.8	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7
弓術	17	平均	4.5	4.5	5.0	4.5	4.9	4.5	4.9	4.4	4.9	4.9	4.8	4.2	4.2	4.4
- Y 101	17	標準偏差	0.6	0.8	0.0	0.5	0.3	0.8	0.3	0.9	0.3	0.3	0.4	0.8	0.8	0.6
ボカシンガ	9	平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.9	4.7	4.7	4.7	4.8	4.8	4.7	4.8	4.8	4.6
ボクシング	_ 9	標準偏差	0.4	0.4	0.3	0.4	0.3	0.7	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.7
			-		-)				

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ科目における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-3に示す。ウィークリー科目同様に、すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。また、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」などの教員に対する評価が高いのに対し、「運動量は適切であった」「この授業によって運動技術が向上した」「この授業は健康や体力の向上に役立った」という学生への効果面で比較的低い評価となった点もウィークリー科目に類似してい

た。シーズンスポーツは休業中の7日間もしくは3泊ほどの合宿で実施されるもので、短期間に集約していることから「健康や体力の向上に役立つ」といった効果をあまり感じなかったのかもしれない。また、合宿種目の中にはアウトドアレクリエーション、山岳などの自然体験を中心とした種目や馬術のように乗馬以外に馬の世話などの体験をするものもあり、「運動量」「運動技術向上」の点で一般の種目よりも得点が低い結果となったと考えられる(表Ⅲ-1-10参照)。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価(シーズンスポーツ全体平均)

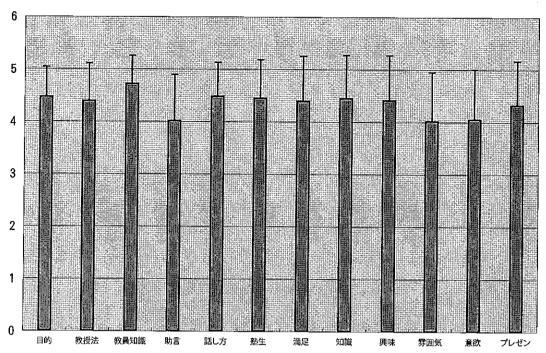
表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧(シーズンスポーツ)

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
空手	28	平均	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	4.9	4.8	4.7	4.7
x.7	20	標準偏差	0.2	0.0	0.0	0.3	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.2	0.4	0.4	0.5	0.5
弓術	31	平均	4.8	4.8	4.9	4.9	4.5	4.6	4.6	4.6	4.9	4.8	4.9	4.32	4.5	4.5
- T PIN	31	標準偏差	0.4	0.4	0.3	0.3	0.7	0.7	0.8	0.7	0.3	0.5	0.3	0.91	0.6	0.6
 水泳	23	平均	4.8	4.7	4.8	4.7	4.7	4.5	4.6	4.7	4.6	4.7	4.7	4.8	4.7	4.4
ANOR	20	標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.6	0.5	0.8	0.7	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.8
山岳	10	平均	4.7	4.9	5.0	4.8	4.9	4.9	4.9	4.3	4.8	4.9	4.7	4.6	3.9	4.1
———	10	標準偏差	0.5	0.3	0.0	0.4	0.3	0.3	0.3	1.1	0.4	0.3	0.5	0.7	1.0	1.2
馬術	29	平均	4.9	4.8	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	5.0	4.9	5.0	4.4	4.3	3.8
Pag Pig	23	標準偏差	0.3	0.4	0.0	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.4	0.2	0.7	1.0	1.3
ヨット	34	平均	4.6	4.6	4.8	4.8	4.7	4.9	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	4.2	4.2	4.4
	37	標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.4	0.5	0.3	0.4	0.4	0.3	0.5	0.2	0.9	0.8	0.7
器械体操	19	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	4.8	4.9	4.8	4.7	4.7	4.6
	1.7	標準偏差	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.3	0.4	0.3	0.4	0.5	0.5	0.5
端艇	2	平均	5.0	5. 0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
-1013-2		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
バレーボール	10	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.7	4.9	4.9	4.9	4.9	4.3	4.4
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.7	0.5
アウトドアレクリエーション	45	平均	4.3	4.4	4.8	4.5	4.3	4.5	4.4	4.3	4.4	4.4	4.2	3.8	3.6	4.0
	10	標準偏差	0.8	0.6	0.4	0.6	0.6	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.8	1.2	1.2	0.9
スキー	27	平均	4.6	4.6	4.7	4.6	4.7	4.5	4.5	4.5	4.7	4.4	4.7	4.4	4.5	4.0
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.9	0.6	0.8	0.6	0.7	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7	1.2
スケート	32	平均	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.9	4.8	4.9	4.7	4.9	4.7
,	00	標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.7	0.4	0.5	0.4	0.5	0.3	0.6

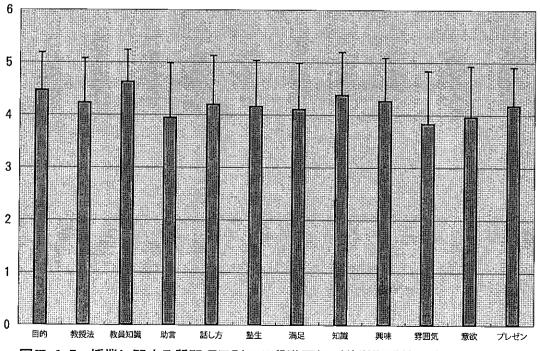
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価について春学期、秋学期別に集計した結果を図Ⅲ-1-4、5に示す。全体として4点をこえる項目が多い評価となっているが、先の実技種目と比較すると厳しい評価がされている項目もある。最も高い評価は実技同様「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」であるが、「教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した」「教員の指導・教授法は適切であった」「この授業では配布資料やプレゼンテー

ションが適切であった」は低い評価であった。 また、「このクラスの雰囲気は良好であった」 「自分はこの授業に意欲的に取り組んだ」の 項目も4点付近の低い得点となった。つまり 単に十分な知識を持っていても、教授法やプ レゼンテーション、クラス内の授業運営面で 不充分な点があることを示している。この結 果から、教授法の一層の工夫・改善に努めな くてはならないことが今後の重要な課題とい える。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価(春学期講義・演習の全体平均)



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価(秋学期講義・演習の全体平均)

3. 通信教育部対象の科目

1) 体育理論

通信教育部の学生を対象とした通信授業(テキスト科目)の体育理論は佐々木玲子、吉田泰将、村山光義の3名で担当し、レポート並びに試験問題の出題・採点を担当した。また、夏期スクーリング(平成17年8月2日(火)から8月9日(火)の日曜を除く7日間)においても保健体育科目として体育理論・保健衛生をオムニバス形式で実施した。スクーリングでの各教員のテーマを表Ⅲ-1-11に示す。

2) 体育実技

通信教育部の学生を対象とした体育実技を 夏期・冬期スクーリングで担当した。夏期は、 平成17年8月2日(火)から8月9日(火) の日曜を除く7日間、14種目を日吉キャンパ スにて午前中の2時間実施した。また、冬期 は平成18年2月10日(土)から2月13日(火) までの3泊4日でスキーを戸狩温泉スキー場 で実施した。各担当者及び履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

表皿-1-11. 平成17年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担 当 者	テ ー マ			
1	斎 藤 郁 夫	高血圧			
保	河邊博史	糖尿病			
健	和井内 由充子	虚血性心疾患			
衛	辻 岡 三南子	医学とスポーツ			
生	徳 村 光 昭	子どもの生活習慣			
	南 里 清一郎	エイズ			
体	佐々木 玲 子	人の成長と加齢に伴う身体機能の変化			
体育理論	村 山 光 義	スポーツと人間の関係及びその教育的意義			
論	吉田泰将	体力トレーニングの理論と実際			

表Ⅲ-1-12. 平成17年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種目名	定員	履修者数	充足率	担当者
	剣道	20	8	40.0%	植田 史生
	柔道	30	. 6	20.0%	安藤 勝英
	ウォーキングエクササイズ	30	27	90.0%	近藤 明彦
	卓球	30	19	63.3%	松田 雅之
	バスケットボール	25	14	56.0%	加藤 大仁
期	バレーボール	30	13	43.3%	石手 靖
	エアロビクス	20	18	90.0%	佐々木玲子
	レクリエーショナル・スポーツ	25	13	52.0%	村山 光義
	体力アップコース	20	20	100.0%	山内 賢
	フットサル	25	19	76.0%	須田 芳正
	水泳	30	21	70.0%	高嶺 隆二
	バドミントン	30	28	93.3%	加藤 幸司
	ソフトボール	25	15	60.0%	綿田 博人
	ゴルフ	20	19	95.0%	勝又 正浩
冬期	スキー	70	54	77.1%	水野 英夫
	合計	430	294	68.4%	_

4. 他学部および塾内における授業協力

日吉・三田において開講される体育研究所 設置の体育科目および通信教育部のテキスト 科目・スクーリング科目に加え、各学部・セ ンターの設置科目や一貫教育校の授業につい ても研究所所員が協力をしている。平成17年度の協力科目および担当者を表Ⅲ-1-13 に示す。今後もこうした塾内における共同参画型の授業を発展させたいと考える。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授業科目名	担当者	開講学部など	曜日時限など	
アカデミックスキルズ I • I I	近藤明彦	教養研究センター 設置科目	木曜 5 時限	
体育Ⅰ、体育Ⅱ・Ⅲ	牛山潤一	総合政策学部 環境情報学部	金曜1、2、3時限	
人体の科学	佐々木玲子、村山光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限	
体育(フットサル)	須田芳正	幼稚舎 (6年生男子)	11月28日	

Ⅲ-2 スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日:平成17年6月4日(土)

2. 会 場:日吉記念館

3. 開催時間:10:30~19:00 (受付・開会 宣言~閉会宣言)

4. 参加チーム数:32チーム

5. 参加者数:約380名(登録選手数259名、 観客約120名)

6. ゲーム数:55ゲーム(1ゲーム15分間) 1チームのゲーム数:最低3・最高6ゲーム

7. 協 力:大会実行学生スタッフ/放送 研究会(K-Sound)/チアー&ソングリー ダーズユニコーンズ/大塚製薬(株)

8. 参加チーム抽選会: 平成17年5月27日 (金) 16:30~18:00 90番教室

9. 応募チーム数:113チーム

10. 結 果

優勝:あ☆ラッキー(笠原照夫、理工4)

2位:てんぐ(新倉理人、環4)

3位:Public Voice(金島大輔、院理 1)

:チーム院生(安藤 錠、院理1)

11. コメント:本大会を終え、「塾長杯フットサル大会」が塾内の多くのフットサルファンに確実に根付いたことを実感した。塾内に 100 を超えるフットサルチームが存在すること自体驚きであるが、それらのチームは出場するための抽選会に整然と臨み、運良く出場の決まったチー

ムは全力を尽くして勝負し楽しんでいた。 その清々しい態度と行動にはキャンパス 行事を運営する者にとって非常に気持ち の良いものであった。またフットサルと いう競技の人気の高さにも驚かされる。

抽選会の実施も2回目となり段取りも良好で大きなトラブルもなく出場チームを決定することができた。競技は得点差の大きなゲームがいくつか見られたが例年同様高いレベルを維持していた。決勝トーナメントに入り PK 戦に勝敗の行方を持ち込む接戦も見られ大いに盛り上がった。また優勝チームに贈られたガラス製のレプリカも好評であった。ゲームの進行も円滑に行われ、長時間審判として協力してくれた体育会ソッカー部部員6名に心から感謝したい。







2) 塾長杯バレーボール大会

1. 開催日:平成17年6月18日(十)

2. 会 場:日吉記念館

3. 開催時間:8:45~17:30 (受付・開会 宣言~閉会宣言)

4. 参加チーム数: 40チーム(最強リーグ 16、一般リーグ24)

5. 参加者数:約450名(登録選手数最強 118名、一般227名、観客数約100名)

6. ゲーム数:73ゲーム1チームのゲーム数:最低3・最高6ゲーム

7. 協力:大会実行学生スタッフ/放送 研究会(K-Sound)/チアー&ソングリー ダーズユニコーンズ/大塚製薬(株)

8. 参加チーム抽選会: 平成17年6月10日 (金) 16:30~18:00 90番教室

9. 応募チーム数:71チーム

10. 結 果

【最強】

優勝:浦和スケルトンズ (浦井大輔、理工3)

2位: KYF(岩岡 洋、理院1)3位: いそのが不愉快な仲間たち (西本卓矢、商2)

【一般】

優勝:C-DASH(平野雄哉、理工3)

: Go! Go!イケ女(星瑞 希、理工2)

: Go! Go! あねご (岡崎栄理子、商2) 11. コメント:昨年度は、先着順の受付を 行ったが、応募締め切り後に50チーム以 上の参加が届いていた反省より、今年度 から申し込み期間中に申し込みのあった すべてのチームの参加による抽選会を 行った。各チームの代表者達は、「大会 に是非参加したい」の思いを込め抽選に 臨み、歓喜する者あり、落ち込む者あり、 またひとつ大会の楽しい場面が増えた。

バレーボールサークルのメンバーや体育会の新人チームも参加した最強リーグは、4チームの4ブロックに分かれて総当たり戦を行い、各ブロックの1位チームによる決勝トーナメントを行った。同様に一般リーグでも、4チームの6ブロックに分かれて総当たり戦を行い、各ブロックの1位チームによる決勝トーナメントを行った。

今年度もユニコーンズによるソング リーディングが披露され、彼女達の迫力 ある演技により大会を大いに盛り上げて くれた。また放送研究会によるアナウン スによっても大会がサポートされてお り、塾生のそれぞれの得意とする分野を 生かした大会が形成された。







3) 塾長杯バスケットボール大会

1. 開催日:平成17年11月26日(土)

2. 会 場:湘南藤沢キャンパス体育館

3. 開催時間:10:00~18:00 (受付・開会 宣言~閉会宣言)

4. 参加チーム数: 24チーム(最強リーグ 12、一般リーグ12)

5.参加者数:約330名(登録選手数最強 男子114名、一般男子85名、一般女子31 名、観客数約100名)

6. ゲーム数:42ゲーム(予選リーグ36試 合/決勝トーナメント6試合)

1 チームのゲーム数:最低3・最高5 ゲーム

7. 参加チーム抽選会: 平成17年11月17日 (木) 16:30~18:00 90番教室

8. 応募チーム数:40チーム

9. 結 果:

【最強】

優勝:理工体2年(加留部秀岳:理2)

2位:aboutl(堺 知久:環2)

3位:ゴールデン (新納 健:環4)

: Musten (水 洋:経1)

【一般】

優勝:Cross(横井 亮:理2)

2位:Best the Seals(田村純一:商1)

3位:サムタイムス(手塚拓也:経2)

:Kagers etc(渡辺真理子:環4)

回で3回目を向かえる塾長杯となり、大会には最強リーグ12チーム、エンジョイリーグ12チームが参加した。男女混合チームや湘南藤沢キャンパスチーム、矢上職員チームの参加もあり、学部・キャンパスを越えた多様なメンバー構成のチームが揃い、大いに盛り上がった。大会は最強リーグ・エンジョイリーグ

10. コメント:湘南藤沢キャンパスでは今

大会は最強リーグ・エンジョイリーグ 共に4チームずつのブロックを3つ作り、総当りのリーグ戦の結果により順位 を決定した。各ブロック1位通過の3 チームと、2位となった3チームのリー グ戦での勝数と得失点により"ワイルドカード"と称した決勝トーナメントに進 出する1チームを決め、計4チームによる決勝トーナメントを行った。すべてのチームに得点板とタイマーなどを積極的に担当をしてもらい、スムーズな大会運営につながった。

最強リーグ・エンジョイリーグ共に予 選リーグから決勝トーナメントまで1点 を争う白熱した好ゲームが多く見られ た。また、エンジョイリーグでは、女子 選手の活躍が多く見られた。









4) 塾内卓球大会

1. 開催日:平成17年11月5日(土)

2. 会 場:日吉卓球場(日吉記念館横体育館内)

3. 開催時間:10:30~16:00 (受付・開会 宣言~閉会宣言)

4. 参加者数:延べ60名(最強卓球シングルス24名、最強卓球ダブルス12ペア、温泉ピンポンシングルス4名、温泉ピンポンダブルス4ペア)

5. ゲーム形式:11点先取3セットマッチ

6. 結 果

【最強卓球シングルス】

優勝:袁 博雅(経済)

2位:吉田 武(非常勤講師、体育会

卓球部女子監督)

3位:足立雅幸(塾員)・

横山 暁(理工)

【最強卓球ダブルス】

優勝:門 鉄平(経済)&

上村知行(経済)ペア

2位:足立雅幸(塾員)&

古川 豊(経済)ペア

3位:ワンダイハン(理工)&

ユアンユシャン (理工) ペア

:高橋陽一郎(SLC 卓球部)&

菅原 翔(SLC卓球部)

【温泉ピンポンシングルス】

優勝:鈴木悌二(塾員) 2位:本間郁郎(職員) 3位:羽村太雅(理工)

【温泉ピンポンダブルス】

優勝:鈴木悌二(塾員)&慶子ペア

2位:松田雅之(教員)&

本間郁郎(職員)ペア

3位:三浦典之(理工)&

新津葵一(理工)ペア

7. コメント:今回で第3回目となったこの大会には、学生、大学院生、教職員のほか、ホームページを見て応募された塾員の方がご夫婦で参加された。

最強卓球シングルスには24名、ダブルスには12ペア、温泉ピンポン(初級者)シングルスには4名、温泉ピンポン(初級者)ダブルスには4名でか参加した。最強卓球シングルスは4名ずつの6グループに分かれリーグ戦を行い、各グループの1位と、2位の中から2名の計8名が決勝トーナメント戦を行った。最強卓球ダブルスは3ペアずつの4グループに分かれリーグ戦を行い、各グループの1位4ペアが決勝トーナメント戦を行った。温泉ピンポンシングルス、ダブルスはそれぞれリーグ戦を行った。

また、吉田武氏(体育研究所非常勤講師・体育会卓球部女子監督)、松本潔氏(体育会卓球部 OB) も大会に参加し、他の参加者を圧倒する強さで会場を沸かせた。







- 2. 体育科目ガイダンス期間中のイベント
- 1)『体力番付』(簡易体力測定)
 - 1. 期 間:平成17年4月8日(金)~14 日(木)(土日を除く)
 - 2. 時 間:①前半ガイダンス終了時(全 クラス)~次回開始まで
 - ②後半ガイダンス終了時(全クラス)~ 次時限開始まで

(4時限はなし)

- 3. 場 所:日吉記念館フロアの一部
- 4. 測定種目: アネロダッシュ・立ち幅跳び・握力 計3種目
- 5. 参加人数:190名(男子134名、女子56名)



- 3. 公開講座(他)
- 1)健康エアロビクス教室
 - 1. 期 間:春—平成17年5月19日~6月 30日 毎週木曜日 全7回 秋—平成17年10月13日~12月1日 毎週 木曜日 全6回
 - 2. 時 間:17:30~18:30
 - 3. 会 場:体育研究所 3 階エクササイズ スタジオ

- 4. 講 師:清水靜代(体育研究所講師)
- 5. 参加者:春21名、秋17名
- 6. 受講料:4,000円(保険料含む)
- 7. コメント:基本的なステップを習得し ながら、エアロビクス(有酸素運動)の特 性を理解し、自らの健康の維持・増進の ために、音楽に合わせて安全で楽しいエ クササイズを実践し、身体を動かすこと の楽しさを実感することを目指した。参 加者の年齢層は20代から60代と幅がみら れたが、年齢の違いによる体力レベルに 大きな差はみられなかったように思う。 参加者にはリピーターの方が多かった が、初参加者もみられた。初参加者の方 は回数を重ねていくうちにダンスにも慣 れ、楽しく踊っていたように思われた。 毎回授業の最後に、健康や体力等に関す る資料を配布し話しをしたが、大変関心 を持っていただけたように思う。







2) 健康ジョギング教室

1. 期 間:平成17年10月17日(月)~11 月4日(金) 計6回 (10/17月、21金、24月、28金、31月、11/4金)

2. 時 間:18:00~19:30

3. 会 場:日吉陸上競技場及び体育研究 所1階トレーニングルーム

4. 講 師:松田雅之(体育研究所講師)

:瀬古利彦(S&B食品(株)陸

上競技部監督、11/4のみ)

5. 補助員 (ペースメーカー): 山内 賢、 野口和行、加藤幸司、清水静代、西村 忍 (体育研究所)

6. 参加者:17名(男性5名、女性12名、 25~56歳)

7. 受講料: 5.000円(教職員¥2.500)

8. コメント:今回は教職員を中心に17名 の参加があった。リピーターの方が多 く、和やかな雰囲気の中で講座を進める ことができた。

全日程を通して、ウォーキングやジョギングの効果的な実践方法を解説しながら、約50分間のジョギングやウォーキングを実施した。ジョギング実施に際しては、血圧、心拍数、歩数等の測定を行いながら、個々人に適した運動量を指示し、ペース別のグループに分かれて行った。また、トレーニングやエアロバイク等を使った健康・体力づくりの方法も取り入れた。最終日には、特別講師として瀬古利彦氏(SB食品陸上競技部監督)を招き、日吉陸上競技場を一緒に走り、その後体育研究所教員室にて楽しいジョギングのすすめについて懇談を行った。





3) アスレティックトレーニングセミナー

1.期 間:春—平成17年6月20日(月) 7月4日(月)毎週月曜日 計3回 秋—平成17年12月2日(金)~16日(金) 毎週金曜日 計3回

2. 時 間:17:30~19:00

3. 会 場:春一日吉キャンパス来往舎 2 階中会議室

秋―体育研究所1階トレーニングルーム

4. 講 師:西村 忍(体育研究所助手)

5. 協力:春一大塚製薬(株) 秋一日本光電工(株)

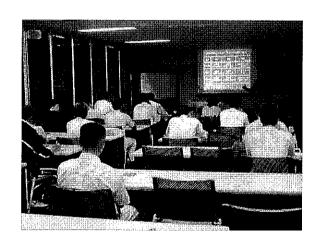
6. 参加者:春16名、秋12名

7. 受講料:無料

8. コメント:今年度より初めて開講した この講座は、春学期と秋学期の2回に行 いそれぞれの内容を変えて行った。春学 期では、①熱中症対策と応急処置につい て、②テーピング理論と実技(足首と膝)、 ③トレーニング方法とスポーツ栄養について行った。秋学期では、①トレーニング理論と方法、②損傷のメカニズムとその対処法、③自動体外式除細動器(AED)の使い方について行った。

参加者の中には、体育会の学生もおり、 熱心にノートを取ったり、テーピングの 練習に励んでいた。損傷のメカニズムと その対処方法では、実際に膝関節を損傷 した参加者の体験談を踏まえながら、リ ハビリテーションの重要性について理解 を深めたと思われる。

2004年7月より一般市民でも使用できることになったAEDについては、日本 光電工(株)の協力を得て、まずはAED の役割や仕組みについて学び、そして実際に器具を使用した体験形式の講習会を 行うことができた。



4) 第20回「スキーのつどい」への講師派遣

- 1. 主 催:慶應義塾大学学生総合センター「大学生活懇談会」
- 2. 期 間: 平成18年2月6日(月)~9 日(木)
- 3.場 所:新潟県南魚沼郡塩沢町スポーツ振興石打スキー場及び上越国際スキー場
- 4. 宿 舎:綿ぼうし
- 5. 引率教職員:伊東裕司(文学部)、石 手 靖・山内 賢・牛山潤一(体育研究 所)、古屋正博・佐野温子・猪川晃司(三 田学生総合センター)
- 6. 参加者数:13名(男子9名、女子4名)





4. 所内施設の開放

1) トレーニングルーム(1階)の開放

1. 期 間:平成17年4月15日(金)~21 日(木)、5月9日(月)~7月14日(木)、 9月26日(月)~12月22日(木)、平成 18年1月6日(金)~19日(月)

2. 曜日時間:月~金 15:00~18:00

利用者数:1098名
 (春学期581名、秋学期517名)

4. コンディショニングトレーナー担当者

月:牛山潤一

火:白井(学生トレーナー)

水:牛山潤一

木:牛山潤一&加藤幸司

金:石手 靖(春)/西村 忍(秋) &清水靜代



2) コンディショニングアドバイジングデー

1. 開催日:毎月曜日・毎水曜日・毎金曜 日(体育研究所受付にて予約)

2. 時 間:15:00~18:00

3. 場 所:体育研究所1階トレーニング ルーム

4. 講 師:西村 忍・牛山潤一(体育研 究所)

5. コメント: 昨年度より始まり、トレーニングルームの一般開放の時間帯に合わせて行っている。今年度より2名の講師

による体制が整い、塾生が抱えるトレーニングに関する疑問やパフォーマンスを向上するためのトレーニング方法などについて個人指導を行った。また、損傷後に行うリハビリテーションについても指導を行った。





3) エクササイズスタジオ (3階) の開放 使用団体:

ボクシング愛好会 週2回 16:30~18:00 通年 ダンスサークル SIG 週1~2回 春学期

チアー&ソングリーディングUNICORNS 週1回 秋学期

以上



IV. 第2特集 「複合施設建設に伴う体育研究所の移転」



日吉キャンパス 銀杏並木入口 右側に設置された移転を知らせる看板



1. 創立150年記念事業に伴う体育研究所棟の取り壊しと移転について

創立150年記念事業の一つである複合施設建設のために、従来の体育研究所棟、プール等が2006年4月から取り壊されることとなり、研究所棟の代替としては藤山記念館2階(研究室、実験室等)、仮設棟(トレーニングルーム、教員更衣室等)、記念館北側控室(エクササイズスタジオ)が充当された。また、新しい体育研究所施設としては、当初複合施設内に置くことが担当常任理事から提案されたが、十分なスペースが確保できないことから、卓球場区域に新施設を建設することになった(2007年春着工、2008年春完成予定)。

以上に関する経過概要は次のとおり。

〈移転の経緯と作業工程〉

- 11月21日 吉田常任理事から体育研究所専任教員に対し、複合施設建設工事開始に伴い、 2006年4月からの体育研究所棟、プール等の取り壊しおよび陸上競技場の改修に ついて説明があった。
- 11月29日 体育研究所臨時専任教員会議
- 12月2日 体育研究所等代替施設に関して体育研究所長他と管財部との打合せを行った。
- 12月8日 西村常任理事と体育研究所長他と意見交換を行った。
- 12月12日 複合施設の図面をもとに体育研究所長他と管財部で打合せを行った。
- 1月14日 日吉キャンパス運営委員会および同幹事会が開催され、日吉における創立150年 事業の推進について協議した。会議終了後、西村常任理事・吉田常任理事から体 育研究所長に対して、先に研究所側から出されていた要望等を検討の結果、体育 研究所は複合施設内には置かず、卓球場区域に新施設を建設したい旨提案があっ た(ただし、プール、トレーニングルームは複合施設内とする)。
- 1月17日 体育研究所臨時専任教員会議で1月14日の理事提案受け入れについて合意。
- 2月6日 創立 150 年記念事業に関する日吉教職員への説明会および日吉キャンパスデザイン・ワーキンググループ(第1回)開催
- 2月24日 体育研究所長から吉田常任理事あてにフィットネスクラブ設置計画に関する提案 書を提出
- 3月14日 日吉キャンパスデザイン・ワーキンググループ (第2回) 開催
- 3月27日~30日 藤山記念館への移転作業
- 4月1日 体育研究所懇親会の開催(さよならパーティー)
- 4月11日 体育研究所全専任教員による研究所新施設検討会

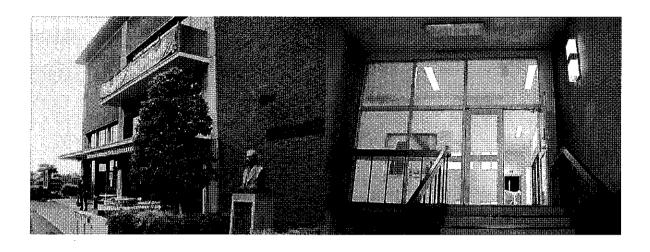
以上

(記録 主事)

2. 体育関連施設の変容(新旧比較)

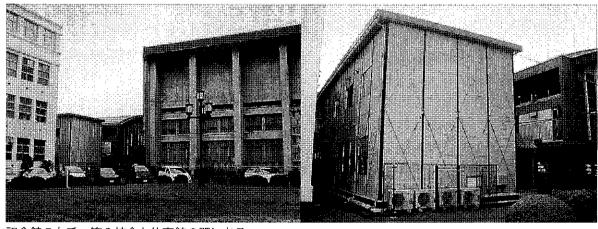
1) 体育研究所

日吉キャンパスのグランドとプールにはさまれ、丘の上にあった体育研究所は、藤山記念館の2階を改築して移転した。カフェテリアを右に、PCルームを正面に見て階段を上がると玄関・受付となる。



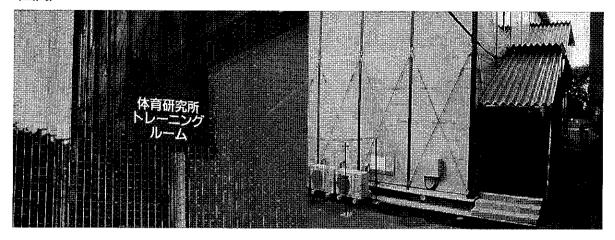
2) トレーニングルーム

体育研究所の1階にあったトレーニングルームは、仮設の建物として記念館の左手に建設された。1階にはトレーニングマシンを使用できるトレーニングルーム1とフリーウェイトを行えるトレーニングルーム2がある。2階には教員室と教員更衣室が設置された。

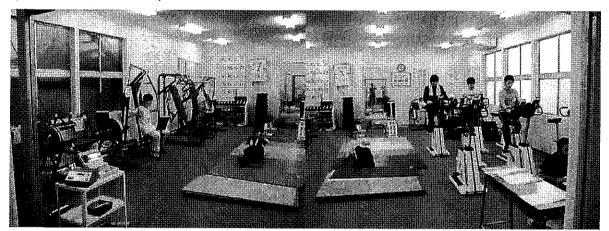


記念館の左手 第2校舎と体育館の間にある。

〈玄関〉

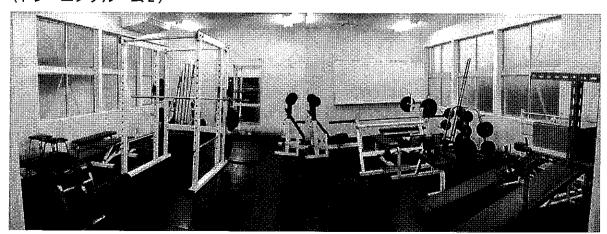


〈トレーニングルーム1〉



トレーニングマシンとエアロバイク・ストレッチマット、ダンベルなどがある。

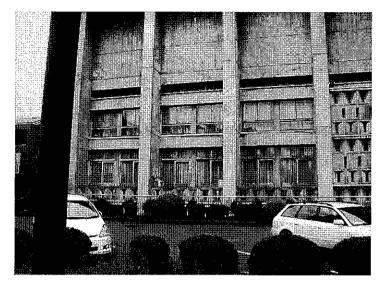
〈トレーニングルーム2〉



バーベル、ダンベル、各種ベンチが設置されている。

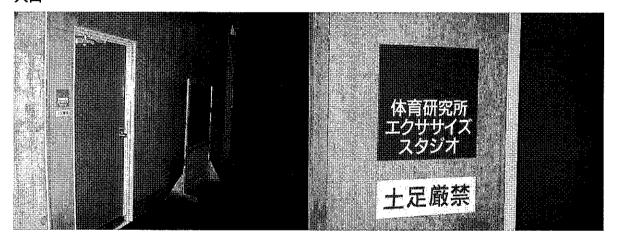
3) エクササイズスタジオ

体育研究所3階にあったエクササイズスタジオは、記念館1階北側控室を改築し、床をフローリングとし、2面の壁には鏡、窓側にはレッスン用のバーも設置されている。

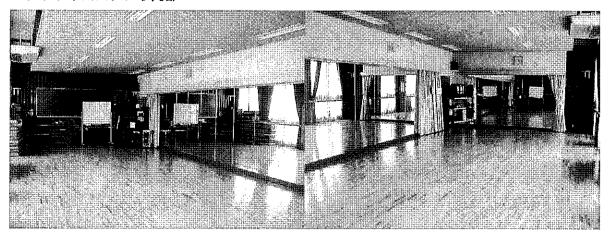


記念館1階 元・北側控室を改装

入口

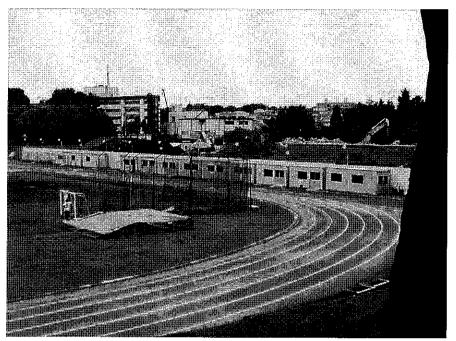


エクササイズスタジオ内部

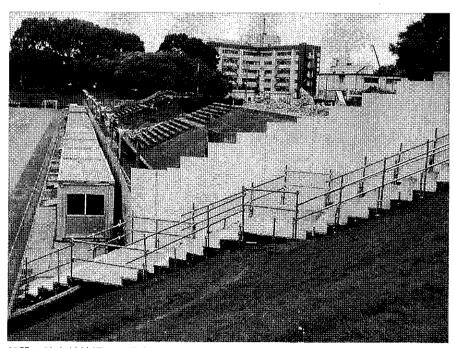


4) 陸上競技場(グランド)

体育研究所が取り壊されたため、陸上競技場を使用している種目の用具・用品を保管するための倉庫が仮設コンテナで設置された。また男女のトイレや昇降階段も設置された。



左の端が男女のトイレ、管理人控室、教員控室、用具・用品倉庫と並んでいる。 綱島街道側ではプールが埋め立てられ、その上で重機が取り壊し作業を進めていた。



架設の陸上競技場への階段

3. 体育研究所懇親会(さよならパーティー)

下段に示したご案内を関係各位に送付し、多くの方々にご参集いただき、会は和やかな中に、 一抹の寂しさを含んで進められた。

体育研究所におけるセレモニーでは、開会にあたり植田史生所長から、これまでの取り壊し に至った経緯や新たな体育研究所の展開など挨拶がなされた。つづいて体育会の宮島司理事よ り、体育研究所・競走部・陸上競技場の思い出が、そして通信教育部の西脇与作部長より、夏 期スクーリングにおける体育実技や学生時代の思い出が語られた。

生協食堂に場所を移して懇親会、再度植田所長の挨拶に始まり、金子芳雄元体育会理事の乾 杯のご発声で歓談となった。

たくさんの思い出を交えた心温まるご挨拶いただいた、池井優・元体育会理事、体育研究所 OBの今榮貞吉・元副所長、筑波大学から斎藤健司・元嘱託助手、景山秀男元体育課職員、同 じく常盤晃職員、望月幸子・稲垣千枝子の元受付のお二人の皆様には衷心より御礼申し上げる 次第である。

最後に中締めの挨拶として、高嶺隆二前所長より御礼の言葉が述べられ、盛会の裡に幕を閉 じた。

平成 18年 2月吉日

名位

大学体育研究所 所長 植田 史生

大学体育研究所懇親会のお知らせ

押啓

ますます御健勝のこととお喜び申し上げます。平素は大学体育研究所のために格別のご高配を賜り厚くお礼申し上げます。

2008 年(平成 20 年)に慶應義熟が創立 150 年を迎えるにあたり、日吉キャンパスの再構築の一環として、現在の本研究所・ブール・90 番製室の位置に、横浜市と連携した新複合施設を建設するとともに、陸上競技場の改修を行うことになりました。それに伴い、本研究所は移転をすることになりました。1975 年(昭和 50 年)に現在の地に本研究所が建設されてから約 30 年の歴史が幕を閉じることになります。

そこで、大学体育研究所OB・OG並びに本研究所に関わりのあった方々をお招きし、旧交を温めると共にこれまでのご尽力に感謝する機会を設けることに致しました。

程たちにとっては新たな出発になるとともに、数々の思い出を刻んだ風景とのお別れの機会ともなります。ちょうど桜の咲く季節でもあります。花見もかねて気軽にお越し下さいますようお願い申し にげます。

32

1. 日時

平成 18 年 4 月 1 日 (土) 15:30~ 大学体育研究所 及び 来往会中会議室

2. 会場

本研究所に起こし下さい。セレモニーの後リニューアルされた生協食堂で 無視会を行います。

〈ご出席いただいた方々:敬称略・順不同〉

池井 優	西村 太良	小川 治之	宮島 司	金子 芳雄	木村 正一
今榮 貞吉	福本修二	ドウトレイ昌子	都丸 禎一	関場 武	西脇 与作
斎藤 健司	小牧久見子	白井 正信	石橋とし子	景山 秀男	常盤 晃
菊地貴与子	稲垣千枝子	望月 幸子	中島 義昭	鈴木 智子	高木 聡子
清水 誠治	勝又 宏	萩原 敬一	国廣 淨晃	林 ひとみ	板谷 紀子
石井真奈美	栗谷 文治	長田 信夫	伊達 幸啓	野村 美夏	佐々木行信
川西 大介	李 宇韺	松山 保幸	濱名 邦雄	望月 康司	吉田 武
松本健太郎	竹村りょうこ	菊池 秀悦	鈴木秀五郎	菊池 啓太	平井 克英
田中由美子	斉藤 隆男	金子 隆司	島田桂太郎	高嶺 隆二	植田 史生
近藤 明彦	安藤 勝英	佐々木玲子	綿田 博人	篠原しげ子	松田 雅之
石手 靖	村山 光義	山内 賢	吉田 泰将	加藤 大仁	野口 和行
須田 芳正	村松 憲	加藤 幸司	清水 靜代	西村 忍	牛山 潤一

以上72名

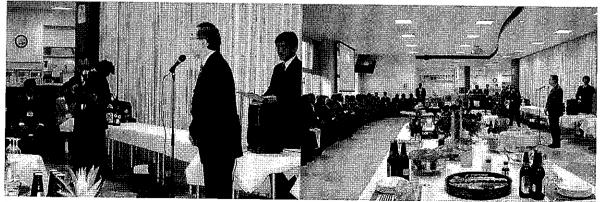
旧・大学体育研究所 エクササイズスタジオ セレモニー風景



慶應義塾体育会 宮島 司 理事

談笑する参加者の皆様

生協食堂 パーティースペース 懇親会風景



挨拶 植田史生 所長

挨拶 西村太良 常任理事

V. 業務活動記録

,		

V. 業務活動記録

1 人事(専仟所員)

(1) 就任

加藤幸司君(専任講師(有期)) 清水靜代君(専任講師(有期)) 牛山潤一君(助手(嘱託))

(2) 昇格

山内 賢君(助教授) 吉田泰将君(助教授) 加藤大仁君(助教授) 村松 憲君(専任講師)

(以上4月1日付)

2 塾内役職

- (1) 大学寄宿舎舎監 近藤明彦君
- (2) 大学教養センター副所長 近藤明彦君
- (3) 大学学生総合センター副部長(日吉支 部)

植田史生君(~9月30日) 石手 靖君(10月1日~)

- (4) 大学教養センター所員 近藤明彦君、松田雅之君、石手 靖君 村山光義君、吉田泰将君、加藤大仁君 (8) 将来構想委員会委員長 野口和行君、村松 憲君
- (5) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委 員 近藤明彦君、松田雅之君
- (6) 日吉キャンパスカレンダー編集委員 4 その他 野口和行君
- (7) 極東証券寄附講座運営委員 近藤明彦君
- (8) 日吉行事企画委員会(HAPP)委員 石手 靖君
- (9) 日吉キャンパスイベント・ギャラリー 企画委員 石手 靖君
- (10) 記念館運営連絡協議会委員 高嶺隆二君(~9月30日) 植田史生君(10月1日~) 野口和行君

3 研究所内役職の主なもの

(1) 所長

高嶺隆二君(~9月30日) 植田史生君(10月1日~)

- (2) 学習指導主任 安藤勝英君(~9月30日) 石手 靖君 (10月1日~)
- (以上4月1日付) (3) 学習指導副主任 吉田泰将君、加藤大仁君

(以上~9月30日)

松田雅之君、村山光義君

(以上10月1日~)

- (4) 総務委員会委員長 綿田博人君(~9月30日) 吉田泰将君(10月1日~)
- (5) 教育委員会委員長 安藤勝英君(~9月30日) 石手 靖君(10月1日~)
- (6) 研究委員会委員長 佐々木玲子君(~9月30日) 村松 憲君(10月1日~)
- (7) スポーツ振興委員会委員長 石手 靖君(~9月30日) 野口和行君(10月1日~)
- 石手 靖君(~9月30日) 綿田博人君(10月1日~)

(1) 所長の任期満了に伴い、「体育研究所 所長選挙規則(内規)|に基づき所長選 挙を次のとおり実施し、新所長に植田史 生君を選出した。

投票:6月28日 8:30~13:00 於・所長室

- (2) 「体育研究所人事内規」、「体育研究所 助手に関する申し合わせ」および「体育 研究所助手(嘱託)に関する内規」の一 部改正(7月5日施行)を行った。
 - (3) 「将来構想委員会設置に関する内規」

- の一部改正を行った(10月18日)。
- (4) トレーニングルームの機器の更新 部門内調整費(1000万円)により、新 機種のトレーニング機器(KEISER)が 導入された。
- (5) 平成17年度日吉予算管理部門内調整費 「新しい教養授業の支援」事業(第2次) 大学教養研究センター「日韓共同スポーツ文化交流を通した教養教育の実践」 601,220円(採択)
- (6) 創立 150 年記念事業に伴う研究所棟の 取り壊し工事開始を前に、4月1日体育 研究所 OB・OG との懇親会を開催した。

以上

(記録:主事)

平成17年度活動報告書

平成18年7月1日発行

[非壳品]

編 集:活動報告書編集委員会

吉田 泰将(委員長)

村山 光義 野口 和行 加藤 幸司

清水 靜代 西村 忍 牛山 潤一

発 行:慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

制 作:(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田 2-15-45

